

**CULTURAL
TYPHOON 2023**

9.12.2023 9.12.2023



**THE NEW PRE WAR
(OR WARTIME)
AND FEMINISM**



**WASEDA
UNIVERSITY**

Cultural Typhoon 2023

新しい戦(中)前とフェミニズム

The new pre-war (or wartime) and feminism

2023 9.2 10:00- SAT. 2023 9.3 10:00- SUN.

主催:カルチュラル・タイフーン2023実行委員会
共催:早稲田大学 教育・総合科学学術院

●チケット代
(共通:現地参加/オンライン視聴(一部コンテンツのみ))

4,000円	2,000円
個人会員A (年会費10,000円)	個人会員C (年会費4,000円)
個人会員B (年会費6,000円)	
一般	学生

●チケット購入
チケットのお申し込みは
こちらから



Peatix


●最新情報、学会への入会
申込についてはこちらから

#CulturalTyphoon2023



<オプション>託児サービス支援のための寄付 一口:1,000円(六口まで寄付可能)

●託児サービスについて
本大会では会場へお子さまと一緒にご来場いただける他、
会場にて託児サービス(要事前申込)を無償で提供しております。
詳細についてはこちらをご確認ください。



●会場
早稲田大学 早稲田キャンパス
Waseda University Waseda Campus
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田1丁目6 14号館

●アクセス
・JR山手線「高田馬場駅」から徒歩20分
・東京メトロ東西線「早稲田駅」から徒歩5分
・東京メトロ副都心線「西早稲田駅」から徒歩17分



●お問い合わせ
カルチュラル・スタディーズ学会事務局
association.ct.secretary@gmail.com



目次

主催者あいさつ P.3
Welcome Message

タイムテーブル P.5
Time Table

会場フロアマップ P.10
Floor Map

基調対話 P.11
Keynote

シンポジウム P.12
Symposium

個人発表 P.15
Individual Presentation Session

グループ発表 P.51
Group Presentation Panel

Project Works P.61

実行委員紹介 P.70
Organizing Committee Members

カルチュラル・タイフーン2023 早稲田大会の開催によせて

わたしたちの生きる社会が、世界が、いつの間にか「戦前」のような状況になってしまっています。誰もが、日々のタスクやジョブに追われて、この世界が今どうなっているのか、わたしたちが向かっているのはどんな未来なのか、考える余裕がありません。まじめに日々の仕事をつづける人たちが硬直したまま、ふざけた扇動者たちが、社会の「空気」を誘導しています。この社会全体が、なにか恐ろしい「勝負」に向かって突き進んでいるようにすら、感じられます。それをわたしたちは、「新しい戦前」と名づけました。それから、すぐに気がつきました。戦争はもう、すでに、始まってしまっているのではないかと。

カルチュラル・タイフーンは、今年で20周年を迎えます。会場は、20年前に、SARS コロナウィルスの不安に見舞われる中で第1回大会を開催した、早稲田大学です。2023年の大会開催日は、奇しくも、関東大震災から100年目にあたる、9月2日～3日です。わたしたちは、大震災やウイルスの進化のような、自然の時間をコントロールすることはできません。けれども、人間の時間である記憶や歴史や文化をどのように語り、考えてゆくのかは、わたしたちの現在にゆだねられています。

実は、大型台風が発生しやすいのも、9月初旬の、この時期です。わたしたちが巻き起こす「文化颱風」は、むしろ、わたしたちの社会の沈滞した空気を一変するような、清々しい台風であるべきでしょう。昨年、成城大学で発生した、規模は小さくとも意義は巨大なフェミニズムの台風が、今年は早稲田で起こるでしょう。一緒に、いい風を吹かせましょう。

カルチュラル・タイフーン2023 実行委員会
実行委員長 浜 邦彦

Welcome to Cultural Typhoon 2023

We now live in a world and society that is becoming “pre-war”.

Everyday tasks and jobs don't give anyone any insight into what's happening in the world or where we're heading. Ridiculous agitators create a social 'atmosphere' while those who remain serious are bogged down in their daily work. It even feels as if this whole society is heading for a terrible 'game'. That is why we called this situation 'the new pre-war'.

And now we have realised: War has already begun.

Cultural Typhoon celebrates its 20th anniversary this year. The conference will be held at Waseda University, which hosted the first conference 20 years ago in the midst of the SARS coronavirus scare. Coincidentally, this year's conference will be held on 2-3 September, the 100th anniversary of the Great Kanto Earthquake in 2023.

We have no control over the passage of time in nature, such as the cycle of a great earthquake or the evolution of a virus. But we do live in the present, in which we have to consider how we deal with our memory, our history or our culture, with human time.

In fact, it is at this time of year, in September, that there is often a big typhoon. Our “cultural typhoon” should be the one that refreshes the present stagnant conditions of our society.

The small typhoon of feminism with significant value that was generated last year at Seijo University will blow again this year at Waseda University. Together we are making a strong wind.

Cultural Typhoon 2023 Executive Committee
Chairperson of the Executive Committee
Kunihiko Hama

Project Works

9.29 - 9.30

PJ 01 6F J 【パフォーマンス】 Read Through the Body 余玖欣 / 松本淳也 ▶P61	PJ 02 5F J 【展示・上映】 『ははの声』『Drifting Islands, Still Water』『CONTACT ZONE ミュージアムショップ』 砂守かずら / 木村奈緒 ▶P62	PJ 03 5F J 【パフォーマンス・展示】 カルチュラル・タイフーンを描く 桜井旭 ▶P62
PJ 04 5F J 【展示】 幕末日本のスケッチ ～英国人が見た12章～ 大村隆景 / 伊藤光 ▶P63	PJ 05 5F J 【展示】 分裂と生成——女性身体の 抽象表現をめぐる—— 羅婧瑄 ▶P63	PJ 06 5F J 【上映】 革命の子どもたちが親になる時 田沼幸子 ▶P64
PJ 07 5F J 【展示】 「自分以外の何かになる」 実践のアーカイブ 宮森みどり ▶P64	PJ 08 5F J 【上映】 Hear the Place Sing 阿部修一郎 ▶P64	PJ 09 6F J 【展示】 “We're from the West Coast”: 西海岸からヒップホップと ダンス文化を語るアSEMBリー 黄柏瀧 ▶P65
PJ 10 5F J 【展示】 ZINE SALON 諫山三武 ▶P65	PJ 11 5F J 【販売】 TeTe Tea Store 白石江里香 ▶P66	PJ 12 5F J 【展示】 エターナル・トラベラー☆ ～カルタイ2023 Ver.～ 宮野かおり ▶P66

9.30

PJ 13 5F E J 【上映】 実存する伝説的ミュージズの軌跡 イデ ▶P67
--

各上映スケジュールや展示の詳細など

Project Worksの
最新情報はこちら!



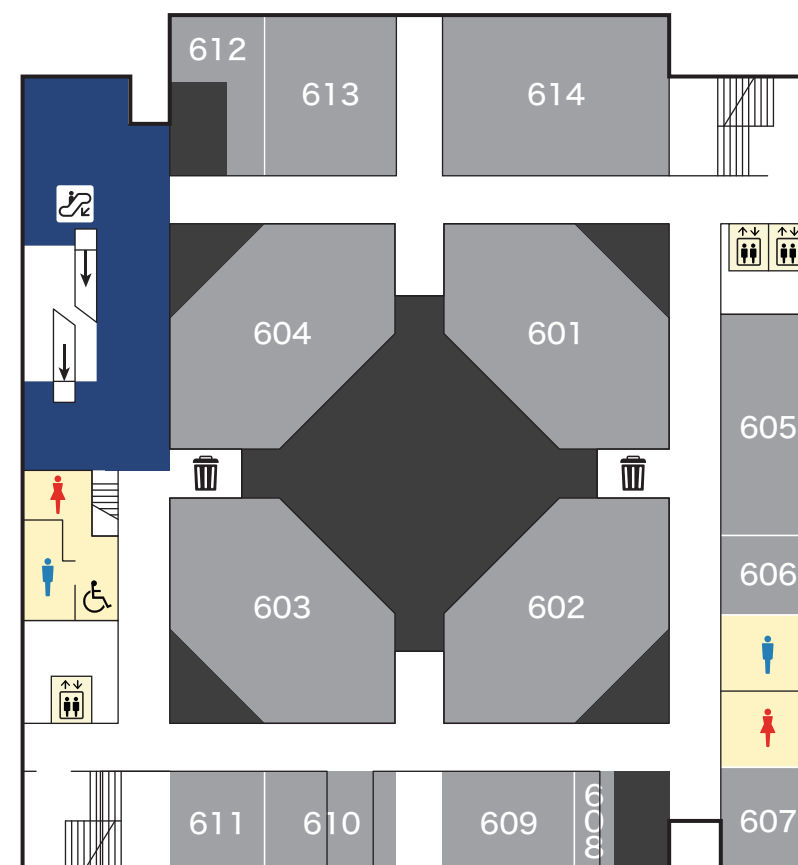
#Culturaltyphoon2023

会場フロアマップ

14号館
5階



14号館
6階



- 基調対話・シンポジウム
Keynote, Symposium
- グループ発表パネル
Group Presentation Panel
- 個人発表セッション
Individual Presentation Session
- Project Works
- 書店街

東アジアにおける新しい戦(中)前と
フェミニズムをめぐる対話: 陳光興をむかえて
A Dialogue on the New Pre-war (Or Wartime) and Feminism, with Kuan-hsing Chen

■ Chair

小笠原 博毅 神戸大学
Hiroki Ogasawara / Kobe University

■ Panelists

陳 光興 台湾・国立交通大学社会文化研究所
Kuan-Hsing Chen /
Institute of Social Research and Cultural Studies,
National Yang Ming Chiao Tung University, Taiwan
Inter-Asia Cultural Studies

伊藤 守 早稲田大学
Mamoru Ito / Waseda University

田中 東子 東京大学
Toko Tanaka / The University of Tokyo

東アジアにおける「軍事的脅威」の喧伝、それを受けての軍事費の増強、監視体制の整備、国境の再強化、国民動員への布石は着々と進む。これは「新しい戦前」なのか、すでに戦争は始まっている(戦中)のか。この事態を東アジアの旧植民地諸国と日本の関係に位置づけ、そこにいまやカルチュラル・スタディーズ運動の基幹となったフェミニズムをぶつけて理解と打開を試みる早稲田タイフーンの本企画。インター・アジアのカルチュラル・スタディーズを牽引してきた陳光興による問題提起によって口火が切られる。

We are in a situation in which military threat propaganda, rapid rise of military budget, surveillance and control society, and reinforcement of national border, all these are on-going to make national mobilisation realistic. Are they new pre-war symptoms? Or are we already in a wartime? At the main dialogic symposium of this year's Cultural Typhoon, this situation is examined in the context of inter-relationships between ex-east Asian colonies of the Japanese Empire and the old coloniser Japan with a help of feminism that has recently become the chief backbone of cultural studies in Japan. The dialogue will be launched by Kuan-hsing Chen who has been an inspiration figure for a long time in the Inter-Asia Cultural Studies sphere.

消される言葉 / 想起する表現
—— 関東大震災 100 年後の東京で ——
Deleted Voices, Recalling Messages: 100 years after the Great Kanto Earthquake

■ Moderator

浜 邦彦 早稲田大学
Kunihiko Hama / Waseda University

■ Panelists

飯山 由貴 美術家
Yuki Iiyama / Artist

FUNI ラッパー
FUNI / Rapper

川端 浩平 津田塾大学
Kohei Kawabata / Tsuda University

堀 真悟 新教出版社
Shingo Hori / Protestant Publishing Co.

今から 100 年前の 1920 年代、王子脳病院に 2 人の朝鮮人患者がいた。しばしばいさかいを起こしては、朝鮮語の歌を歌っていた。診療記録(カルテ)は残っているのに、彼らの朝鮮語も、その歌の意味も、また 2 人が心を病んだ理由も不明なまま、記録だけが残された。

飯山由貴の映像作品《In-Mates》は、残された記録をもとに、2 人の朝鮮人の心と言葉を全身を使って表現しようと試みた、川崎・桜本の在日コリアンラッパー FUNI のパフォーマンスを撮った、26 分のフィルムである。

ところが昨年、この作品が関東大震災の朝鮮人虐殺の歴史に触れているという理由で、さらには FUNI の歌詞が「ヘイトスピーチ」を含むという理由で、東京都人権プラザでの出展を拒否されるという事件が起こってしまった。

何が問題なのか。

関東大震災からちょうど 100 年後にあたるカルチュラル・タイフーンで、私たちは《In-Mates》を上映し、FUNI の生身のパフォーマンスを体感することで、隣人たちの心や言葉が見えなくなっている今の時代、それゆえに「他者」に対する粗暴なプロパガンダの言葉ばかりが拡散してゆく今の社会——新しい戦(中)前?——に、100 年前の光景を重ねつつ、魂をもったラップの言葉が、検閲される表現が、どのような思考の現在や未来を劈(ひら)いているのかを、美術、音楽、コミュニティ、宗教、歴史を横断しながら考察する。

There were two Korean patients at Oji Mental Hospital in the 1920s, about 100 years ago from now. It is recorded that they often had trouble quarreling with each other and used to sing Korean songs. Their medical records do not tell us what they talked and sang in Korean nor what were the causes of their mental illness, because their Korean language was unintelligible for the medical staff at that time. In-Mates, the video works created by Yuki Iiyama, attempts to recall such voices of two Koreans through performances of a 2.5 generation Zainichi Korean rapper FUNI. Meanwhile, we must note that this work was rejected to exhibit at Tokyo Metropolitan Human Rights Plaza since it dealt with the history of the massacre of Koreans during the Great Kanto Earthquake and FUNI's lyrics representing two Koreans are regarded as hate speech. What's going on? In this symposium held 100 years after the Earthquake, we are going to screen In-Mates with a live rap performance of FUNI to recall messages of the past. By articulating the past and the present age of New Pre-war (or Wartime?) when it becomes more difficult to sense the feelings and words of our neighbors while the violent languages of propaganda diffuse over both on streets and cyberspaces. By intersecting the art, music, community, religion, and history, we are going to examine how the language of rap music and the censored art expression illuminate thoughts of present and future.

トランスジェンダーの物語とエンパワメント：
連帯の歴史を記憶するために

The stories of transgender and empowerment : remembering the history of solidarity

■ Moderator

岩川 ありさ 早稲田大学
Arisa Iwakawa / Waseda University

■ Panelists

高井 ゆと里 群馬大学
Yutori Takai / Gunma University

三木 那由他 大阪大学
Nayuta Miki / Osaka University

水上文 文筆家
Aya Mizukami / writer

トランスジェンダーの物語はこれまでも紡がれてきたし、今も、紡がれている。トランスジェンダーの人びとの生を軽視したり、差別や偏見につながる言説が多くなる一方で、たしかに紡がれてきた物語は、トランスジェンダーの人びとを勇気づけ、生きるための力をくれるだろう。同時に、ショーン・フェイ『トランスジェンダー問題—議論は正義のために』（高井ゆと里訳、明石書店、2022年）が明らかにしたようにトランスジェンダーの人びとが解放された世界はほかのマイノリティにとっても生きやすい世界なのだ。だが、考えてみると、家父長制がまかりとおり、経済的格差が広がり、暴力にあふれた世界を変えたいのはわたしたちだけではないだろう。トランスジェンダーの物語がエンパワーするのはほかならないあなたなのだ。

これまでも、連帯の歴史は続いてきた。その連帯をわたしたちは記憶したい。2022年には、『反トランス差別ZINE われらはすでに共にある』（反トランス差別ZINE編集部＝青本柚紀、高島鈴、水上文）が刊行され、2023年8月に増補版『われらはすでに共にある：反トランス差別ブックレット』（現代書館）が刊行された。『シモーヌ』Vol.5で、高井ゆと里が書いた「時計の針を抜く：トランスジェンダーが閉じ込めた時間」にあるように、トランスジェンダーの人びとはブログやSNSで豊かな言葉を紡いできたし、ほかにも多くの多様な表現があったことも重要である。文芸誌『すばる』2023年8月号では「トランスジェンダーの物語」特集が生まれ、周司あきら、高井ゆと里『トランスジェンダー入門』（集英社新書、2023年）が刊行され、エンパワメントは現在進行形で続いている。

だが、わたしたちが記憶しなければならないのは、連帯して迫害に抗ってきた歴史だ。作家の李琴峰は、「朝日新聞」（2023年5月12日）の記事「LGBT迫害から立ち上がる シドニーで見た歴史への敬意」で、世界最大規模のLGBTの祭典マルディ・グラを訪れたときに見た、シドニーのボンダイビーチの崖の上にある追悼記念碑に刻まれた言葉を踏まえてこう書いている。「記念碑の名は、「Rise」——蜂起する、立ち上がる、の意だ。LGBTは人間の歴史を通して一緒にたにされて迫害を受け、それでも何度も強く立ち上がって闘ってきた。これからも連帯のために手を携えて生きていこう。私はそう信じている」。物語はエンパワメントする。物語は抵抗する。物語は連帯する。そのためには、歴史を学び、伝え、記憶する必要がある。このシンポジウムが目指すのは、その可能性である。

People have spun the stories of transgender and keep on spinning today. While the discourse that belittles the life of transgender people and causes more discrimination and prejudices has increased, these stories will encourage transgender people and give them the power to live. At the same time, as Shon Faye revealed in “The Transgender Issue: An Argument for Justice” (Yutori Takai [Translator], Akashi-shoten, 2022), any other minorities also can live comfortably in the world that liberates transgender people. But, it would not only be us who want to change the world with patriarchy remaining, widening economic inequality, and filled with violence. It is no one but you that transgender stories empower.

The history of solidarity has lasted in the past as well. We want to remember that solidarity in our hearts. In 2022, Gendai-shokan published “Han toransu sabetsu-jinn - warera wa sudeni tomo ni aru (Anti-Transphobia Zine - We are already together),” and the release of the enlarged edition was in August 2023. As Yutori Takai wrote in “Tokei no hari wo nuku - toransujendaa ga tojikometa jikan (Pulling out the hands of a clock - the time that transgender locked up)” in “Les Simones” vol.5, it is important to note that transgender people have weaved their words through blogs and social

media, and plenty of other various expressions have been created. The literary magazine Subaru featured “The story of transgender” in the August 2023 issue, and “Toransujendaa nyumon (The introduction to transgender)” (Shueisha-shinsho) by Akira Shuji and Yutori Takai was also published in 2023, indicating that the empowerment is ongoing right now.

However, what we should keep in mind is the history of resisting persecution through solidarity. In the article of the Asahi Shimbun, May 12, 2023, “LGBT hakugai kara tachiagaru - shidonii de mita rekishi eno keii (Standing up from the persecution of LGBT - the respect to the history that I saw in Sydney),” the writer Kotomi Li describes as follows, with referring to the word engraved on a monument on the cliff in Bondi Beach, Sydney. “Rise” is the monument's name, which means to revolt and stand. Throughout the history of humanity, LGBT has been persecuted and lumped up together, nevertheless standing up and fighting.

I believe that they will hold hands and live together for solidarity.” A story empowers. A story resists. A story solidifies. Thus, we need to learn history, pass it to the next generation and remember it. The goal of the symposium is that possibility.

■ Chair

Hiroki Ogasawara
Kobe University

Breakup Support Group on Social Media: Popular Feminism in China

■ Panelist

Yan Tan
University of Macau

The media has played a significant role in shaping people's knowledge, expectations, and practices about intimacy. Previous studies have examined how the media constructs romantic relationships and facilitates sexual practices in contemporary China. Yet, the role of social media in negotiating intimate lives remains unexplored. This article takes Douban Break-up Advice Group (hereafter DBAG) as a case to examine the implication of social media in mediating intimacy in the Chinese context.

Douban is a social media platform known for its thematic discussion groups formed by ordinary participants. It is also known for the controversy of censoring feminist voices towards heterosexual marriages. DBAG is formulated to narrate love stories, seek relationship advice and offer emotional support, of which women are primary participants. In this breakup support group, the topics unfolded revolve around failed love experiences or complaints about mates and thus reflect the contradictions of romantic relationships in contemporary China. This article conducts an online ethnographic study to explore how participants make sense of romantic relationships and define what intimacy means on their own terms. It aims to address the platform's technical and cultural uniqueness for cultivating alternative imaginaries about intimacy.

This article argues that DBAG constitutes an intimate public sphere where a therapeutic ethos is nurtured to heal emotional wounds and guide love choices. In this space, women cultivate a sense of empowerment and formulate principles of self-regulation. It also serves as a pedagogic space in which women exchange emotional knowledge about female autonomy and gender equality to achieve ideal romantic relationships. In this way, DBAG develops a culture of girlfriendship characterized by a new form of female sociality and ethics. The participants formulate specific gender visions, norms, and values toward femininity and heterosexual romance and regulate the conduct of members through the girlfriend gaze. This study contributes to the scholarship on mediated intimacy and popular feminism in China.

Reclaim Bodies that Bleed: Defining Japan's Menstrual Poverty through Online Menstrual Activism

■ Panelist

Leng Junxiao
The University of Tokyo, Graduate School

This research examines the gender power imbalances in Japan through the lens of menstrual poverty. The phenomenon of menstrual poverty (seiri no hinkon) has garnered significant attention from the Japanese mass media since early 2021, with mainstream society perceiving it as a result of young, cisgender women's inability to afford menstrual sanitary products due to poverty caused by the Covid-19 pandemic. However, young menstrual activists in Japan contend that menstrual poverty is not solely an economic issue but a socio-cultural one that affects people of various ages and gender identities beyond the pandemic. Based on participant observation and interviews, this chapter elucidates the power dynamics involved in the ongoing struggle between the Japanese state and young menstrual activists. Drawing from Bobel and Fahs's (2020) theory of radical menstrual embodiment and Banet-Weiser's (2018) theory of the economy of visibility, I argue that the emerging menstrual activism in Japan aims to bring to light the unrecognized menstrual needs and diverse experiences of menstruation across the gender spectrum. However, its efforts are conditioned by a cisgender-male-centered neoliberal state that treats menstrual bodies mainly as unwaged reproducers and commodities, where menstruation is rationalized as resources for population growth and targets of new markets. Like all other forms of digital feminist activism, menstrual activism in Japan cannot avoid being partly appropriated by the exclusionary economy of visibility, which renders hypervisibility to young, cisgender female while marginalizes menstrual needs of all others, particularly transgender and non-binary individuals. Despite so, the existence of young, critical menstrual activists remains significant as they continue to challenge and disrupt the controlling and disciplining powers to reclaim the autonomy of every body that bleeds.

Session B **教室508** **10:00-11:30** **Japanese**

■ **Chair**
 挽地 康彦
 和光大学

■ 戦前日本の中等学校陸上競技と翼賛体制の関係について

■ **Panelist**
 高見 哉多
 神戸大学

学校における体育系部活動は日本のスポーツを支える意味でとても重要な役割を担っている。例えば、高校野球の全国大会である通称甲子園大会は、優秀な選手が多数集まっており、その後のプロ野球界への影響は大きい。またインターハイでの各種目も同様に日本のスポーツを発展させる上で非常に重要な役割を果たしている。しかしながら、近年ではこれらの大会があまりにも過熱しているのではないかという批判もあり、スポーツの在り方が見直されている。ところで、こうした大会の起源は戦前の旧制中学校の諸大会にあり、日本の運動部部活は戦前から活発であったことが報告されている。戦前の体育史に関してはまだまだ研究が不十分であったり、その情報が不確かなものも数多く存在する。しかしながら、先行研究が指摘しているように、現在の体育系部活の過熱化は、戦前の中等学校時代の部活動に起源を持つと考えられるので、各スポーツの中等教育時代からの歴史や社会的事象との関わりを明らかにする必要がある。

今回の発表では、そうした戦前の体育系部活動と翼賛体制との関わりについて取り扱う。特に、戦前の中等教育学校における陸上競技部の存在や組織が翼賛体制に対してどのように協力したのかについて明らかにしたい。中等教育学校の生徒として体育活動、特に陸上競技者として競技に取り組む中で戦争とどのように向き合ったのか、さらに競技者に内在するメンタリティが翼賛体制にいかに関わっていたのか、そしてその理由についての考察も行う。本発表の焦点は学生スポーツと軍国主義的思想との関わりについてであり、今回は中等学校における部活動（特に陸上競技）がいかに翼賛体制に協力したかを問う。そして、新しい戦前である現代の学生スポーツをも考察する手がかりを探す。

■ 「日本化」し「国際化」した沖縄空手の身体技法と表象

■ **Panelist**
 柄本 三代子
 東京国際大学

空手は今日世界中に多くの実践者がいる。習得によって期待されているのは身体の鍛錬だけでなく、人格形成など多面的な魅力が見いだされている。多くの流派とその組織があるが、元をたどれば沖縄にたどりつく。沖縄で誕生しつつかわれた思考や身体技法が、「日本」あるいは「アメリカ軍人」「移民」を経由してもまた世界中に伝播していった。たとえば「日本のもの」として認められることは、柔道や剣道といった武道とひとくくりにされることでもあり、本来の姿と切り離された一部が継承されることを意味した。また世界的普及において駐留米軍のはたした役割は大きかったが、そこでもまた選択的な理解が優先された。多くの場合華々しい「格闘」および「競技」としての側面が強調されることになった事例のひとつがオリンピック空手と言っていい。

このように沖縄空手が内外に伝播していく過程において、さまざまな変容が余儀なくされていったにもかかわらず、その思想は身体技法とともに脈々と受け継がれてきてもいる。空手をめぐる動きのひとつひとつは、長年にわたって蓄積され伝授されてきた「身体を取り扱う技法」といいいい。それらは流派の違いを超え、「空手に先手なし」といった思想を背景として稽古に付随するさまざまな身体動作とともに継承されている。

内外に向けた沖縄空手伝播の歴史的社会的背景をふまえつつ、沖縄とイギリスを中心としたフィールドワークをもとに、海外において空手がどのように受容されているのかについて考察する。たとえばイギリスにおいて空手を実践する者たちは、「頭を下げる」「膝まづく」「黙想」「先生とよぶ」という所作をはじめとして、道着や帯、道場、試合会場などにちりばめられた「日の丸」や「日本人」「漢字」「名前のカタカナ表示」、あるいは稽古の際に使用されるさまざまな日本語によって「由来」を常に意識できるようになっている。これらをクールジャパンとの関連で議論することも可能であろうことは、空手を始めるきっかけが日本製のアニメや漫画であることも多い、という点に示される。

■ 第一次下着ブームから考える、戦後「日本人女性」の概念的構築

■ **Panelist**
 白木 美幸
 東京大学大学院

本研究は戦後の日本人女性の概念的構築に迫る。下着を M. フーコーにおける「自己のテクノロジー」と理論的に位置づけ、1950 年代日本における第一次下着ブームがどのように理想とされる日本人女性性を定義し、その体现の為にはどのような身体のあり方を必要と啓蒙したのかを示す。常に「戦争」の渦中にあるフェミニズムを歴史研究を通じて検討することで、現代に脈々と受け継がれる家父長制の社会構造を批判する。

1950 年代は女性解放の時代と解釈されることが多い。GHQ/SCAP 占領下の社会政策の一環として、権利と罰則、すべての点において男女平等の原則が法的に定義づけられ、女性の権利を取り巻く状況が一変した。しかし、60、70 年代になると女性の権利は、特に労働環境において戦前並みの水準に戻ったとされる。また、70 年代のウーマン・リブの女性解放活動ではそれまでの女性に対する抑圧が声高に批判された。この状況を鑑みると、法的な権利制定より他に、50 年代に実質的な女性解放が進んだと見なすことには一定の憂慮を示さなければならない。しかし、戦後、ウーマン・リブ以前では、女性性に関して直接的に言及するような公共的な言説構築は散発的であり、女性解放の実態を掴み取るに足りない。

1950 年代の女性性の構築と解放の是非を研究課題として捉え、本研究は戦後、日々どのように近代的な日本人の女性性が概念的に構築されたのかを検討する。特に、50 年代は日本で初めて西洋下着が大衆化された「第一次下着ブーム」とも時期的に重なる。そのため、下着のマーケティングの過程に着目することで、日本人女性性が「西洋」「近代」等といった概念と拮抗してどのように言説的に啓蒙・構築されたかを明らかにできると考える。下着の着用法を啓蒙的に記述した女性誌・スタイルブック・教科書の言説分析を行い、言外に表れる公共概念を分析する。

Session C **教室510** **10:00-11:30** **Japanese**

■ **Chair**
 山本 敦久
 成城大学

■ 現代日本の脱毛文化における「医療」と「エステ」の表象

■ **Panelist**
 河野 夏生
 奈良女子大学大学院

発表者はこれまで、女性を脱毛へと駆り立てる近代から現代にかけての日本の広告イメージを検証し、「脱毛文化」の自明性とそのジェンダー規範を明らかにした。本発表では、脱毛広告を発信する脱毛クリニックと脱毛サロンをめぐるイメージと言説を分析し、それらの表象空間におけるポリティクスを検討することで、脱毛文化の構造の一端を明らかにする。

脱毛クリニックと脱毛サロンは、前者は医療行為として「医療脱毛」を行い、後者は医療行為を伴わない「エステ脱毛」を提供するという違いがある。2010 年代以降、数十円から数百円という極端に安価な脱毛サービスの提供を謳う脱毛サロンが登場したことで、金銭的余裕のない若年女性たちが手軽に脱毛サービスを受けることが可能になり、体毛処理のアウトソーシング化が急速に進んだ。しかし近年、脱毛サロンをめぐる契約のトラブルや広告表示の違法性を指摘する報道がマスメディアによってなされるようになり、2022 年度には脱毛サロンの倒産が相次いだ。しかし、これらの報道は脱毛しないという選択肢を提供するのではなく、より安全で効果の高い高価格帯の医療脱毛への誘導を助長する可能性が指摘できる。

また医療脱毛は剃刀やクリーム、ワックスなどの自己処理が肌にトラブルを起こす可能性について言及しながら、エステ脱毛よりも効果が高いことを専門用語を用いて強調し、医療脱毛が最も「安心安全」であることをアピールする。さらには医療行為としての「必要性」を示すために、毛深いことが原因で「いじめ」にあった女生徒や「自殺」した若年女性のエピソードなどをあげながら、脱毛が人命を救うかのように主張するものもある。

以上のように、脱毛文化空間における「医療」と「エステ」の表象の対称性に着目することにより、両者の「対立」が補完関係を生み出すこと、さらにそれにより脱毛文化の構造がより強固になることを明らかにする。

越境と悪魔化——憎悪の物語定型の伝播としての Twitter 上でのトランス排除運動の拡大——

■ Panelist

田村 貴紀

5月10日、自民党片山さつき議員はLGBT理解増進法の「『性自認』を理由とする差別は許されない」などの文言に対して、「女性や、性転換で女性になった人にとって、無防備になるトイレは襲われるリスクがある。」などと夕刊フジにコメントした。

2019年以降、トランスジェンダー女性排除論がTwitter上に台頭した。それは主にトランス女性を「トイレ、女湯などで性暴力を行う可能性のある主体」と主張する。片山のコメントは、このネット上のトランス排除論が政党政治の中心に達したことを意味する。

本発表は、次の仮説を持つ。

上記のトランス排除論は、「誤った二分法」を使った議題設定によって「女子トイレと女湯」を境界線として設定し、それを越境する「トランス女性」を悪魔化する論法である。これは一定の「語彙と物語定型」によって構成されており、差別者はその「語彙と物語定型」を習得することによって、自分が発明したかのように自らの差別物語を生成し拡散していく。

そして、この憎悪の物語定型は、「日本人」という曖昧で強固な境界線を引き、越境する外国人を悪魔化する排外主義の物語定形と構造が類似している。

この仮説を検証するために、「トランス女性」に関する約29万3千件（2018年後半～2023年前半）のTwitter投稿を計量テキスト分析し、単語を指標とする記事分類によってその物語定型を数量的に抽出した。

2018年1月から11月まではこの物語定型は全投稿の28.8%を占める程度であったが、2018年12月に48.5%に急上昇し、2019年から2022年まではほぼ40%前後を推移していた。しかし、LGBT理解増進法の議論が始まった2023年前半には再び48.2%まで上昇し、「LGBT理解増進法」を検索語とするTweet群でも25.84%を占める。人権に対する脅威が増大している状況である。

発表では、上記の指標とした語群を、ネット上の排外主義について計量テキスト分析を行った先行研究で抽出された語群と比較し、その構造的類似性と連動する危険性について考察する。

could counterbalance the forces of architectural trends, while providing a sustainable way of architectural and cultural preservation, focusing on urban stories rather than authorised heritage discourses. This has the implication to highlight the domestic histories that are relegated to the background amidst the dynamics of modernisation and urbanisation - or even heritagisation. The self-organised grassroots initiative behind the magazine serves as an example of how we can look at the city's vernacular heritage from a different perspective. This hidden conflict over the right to the heritage of historic cities is all the more important in our turbulent times.

The neglected community power ——new immigrants' disaster literacy and resilience: a communication approach——

■ Panelist

Chiung-wen HSU

National Cheng Chi University

As the conference theme suggested, we live in a pre-war or new-war society, facing chaos, risks, crises, and many ridiculous circumstances and atmospheres.

In addition to examining the causing factors, we must consider how to deal with the influences on us, including our daily life, memory, history, and culture. With this chance, I would like to present my current study-- the new immigrants' disaster resilience building in Taiwan. According to government statistics, there are more than 570,000 immigrants, and 92% are female. My study will focus on the new immigrants who came to Taiwan less than a decade. Through those new immigrants' resilience-building process, we can see the bottom-up strength to deal with hardships.

In traditional disaster research, new immigrants, as a demographic variable, are categorized as a disaster-affected minority. In addition, their resilience is seen as a static state, not a dynamic process. This proposal tries to find out the new immigrants' disaster literacy and resilience using the communication approach claimed by Buzzanell (2010). Employing five issues: examining their crafting normalcy, affirming identity anchors, maintaining and using communication networks, putting alternative logic to work, and downplaying negative feelings while foregrounding positive emotions, the study elaborates on their communicative resilience process.

Then, this study proposes that new immigrants have different degrees of capital, which are beneficial to respond to disasters. Three communities in Taiwan based on the degree of urbanization are selected as the research fields to conduct in-depth interviews, focus group interviews, and participatory observation.

Theoretically, this study would contribute to the research concept of resilience with the communication approach. Practically, the new immigrants are not always the weak minority. With their disaster literacy and wisdom from their mother countries and life experiences, they could be non-neglected power in the communities.

Session D

教室505

15:00-17:00

English

■ Chair

Satofumi Kawamura

Otsu Women's University

Looking Beyond the Authorised Heritage Discourses of the City: YaNeSen Magazine and the Preservation of Tokyo's Everyday Cultural Practices

■ Panelist

Solyosi Tamas

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba

This study examines how a group of young women in Nippori created a place of memory. Around October 1980, a magazine called YaNeSen was published, which served as a centre for local historical, cultural and social life. Using thematic analysis on the discussed topics of the magazines, with a special focus on the English publications and the online available headlines to locate the sense of place gives us a way to shed light on the everyday cultural practices and the decaying and disappearing local communities. Understanding this as an element of the cultural heritage of a past Tokyo gives us the opportunity to look at the built environment and the related bottom-up practices that can help us understand and read the city through everyday practices. The magazine served as a way to connect the local people, to give them a chance to look for meaning outside of their workplaces and reconnect to their local reality. This newsletter, produced by local women, provides a way to look at the processes of modernisation and globalisation in Tokyo from a different perspective, one that emphasises local values and the local community in the face of the unifying forces of urban development. The local movement

Photography in the AI Expanded Field

■ Panelist

Suzanne Mooney

Tama Art University

The photographic image is in crisis. In 2022, a degree of proficiency in AI image generation was reached that is certain to further erode the fallacy of ‘trust’ in photography. Documentary images can be generated in moments, limited only in number by the processing computer’s GPU and video RAM. Innovators of AI technologies are calling for regulations of the technologies they created, at national and international levels. Artists and image-makers are fearful of redundancy, and as these conversations play out on the global stage, AI-generated text and imagery have already become part of our visual culture.

Technology mediates our visual culture, and has a profound impact on how we experience the mediated world. In this soon-to-be infinite sea of visual information of indefinable origin, the parameters of photographic image definitions must be reconsidered.

This paper will present practice-based research that attempts to find limits of the definition of photographic images in digital media art, considering not only the method of production, but also the viewer experience of art created using AI text-to-image technologies. One criticism of AI image generation is the lack of authentic expression, creativity, and other qualities that have until now been reserved for human creators. This research is less concerned with identifying an authentic act of art creation, but rather with what happens when photographic imagery breaks the boundaries of photography as a documentary medium, and the new possibilities that might arise from photographic ‘shooting’ in virtual environments, and as imagined by neural networks, in this new and expanded field of photography.

Considering non-human photography as a basis, this presentation will aim to, if not answer, ask specific questions to focus a coherent debate around viewer experience of digital visual art created using recent AI technologies.

The Rise of Digital Platforms and the Emergence of the New Media Documentary Film Industry in China

■ Panelist

Seio Nakajima

Waseda University

With the rise of digital platforms such as YouKu, Tencent Video, Bilibili, and iQIYI, a new sub-genre of documentary film called the “new media documentary” (NMD) (xinmeiti jilupian) has emerged in China. According to the Research Report on the Development of Documentary Film, the four major video streaming platforms invested 1.1 billion yuan in documentary film production in 2018—an 83% increase from the previous year. NMD is often characterized by its highly diversified contents, relatively short length, and interactivity. In terms of content, documentary films on “food,” which is one of the most popular, can be diversified into numerous subtopics—for example, those focusing on food in societies around the world, on breakfast in a particular Chinese region, or exclusively on hotpot. As for the length, most NMD is relatively short—30 minutes or even shorter in the case of the so-called “micro documentary film” (wei jilupian). In terms of interactivity, due to the interactive nature of digital platforms in general and the function of “barrage subtitling” (danmu) in particular, active audience participation often characterizes the viewing practices of the NMD. NMD is “new” not only in its content diversification, short length, and interactivity—which may result from its reliance on digital platforms for distribution and exhibition, but also in its mode of production squarely aiming at economic profit. This “market-oriented institutional logic” differs significantly from the earlier “non-profit logic” of the state-sponsored newsreel tradition and CCTV programs, as well as the more recent “independent logic” of the New Documentary Film Movement. To disentangle the sources of the market logic in the newly emerging platform economy in China, I put to work the “six-facet model” of 1) technology, 2) law and regulation, 3) industry structure, 4) organizational structure, 5) occupational career, and the 6) market.

Session E

教室508

15:00-17:00

Japanese

■ Chair

浜 邦彦

早稲田大学

フランスの規制機関 ARCOM による性差別的表現への規制とその有効性

■ Panelist

小林 万里子

東京大学大学院

フランスにおいて視聴覚メディアを監督する独立規制機関 ARCOM (Autorité de régulation de la communication audiovisuelle et numérique) は、2006 年以来差別との戦いの一貫として、テレビ・ラジオの放送番組がフランス社会の多様性を反映しているかを監視・監督する任務を担っている。ARCOM が設置した視聴覚多様性監視委員会は、毎年「フランス社会の多様性バロメーター」において質的調査による評価を行う他、差別的表現に対しては放送事業者に制裁を課している。本発表は、ARCOM が行うテレビ・ラジオ番組における差別的表現への規制に焦点を当て、その現代的有効性を検討する。ARCOM は組織的な放送番組の 24 時間モニタリングにより、番組内に差別的表現がないかを監視し、違反を見つけた場合は放送局に対して介入を行っている。それは段階的なもので、ARCOM は制裁の手続きに入る必要がないと判断した場合は規制への喚起や警告を行い、法廷の原則及び義務違反行為の認定後、ARCOM が必要と判断すれば催告、その後制裁を放送局に課している。制裁は、番組及び CM の放送・配信の停止や免許期間の短縮、金銭的な制裁から、最悪の場合は認可取り消し、契約の解除に至る。ARCOM の発表しているレポートによると、2014-2018 年の間に女性の権利に関して行われた介入は 23 件で、制裁までいかなかった事例が 21 件、制裁として 2 件あった。本発表はそれらの介入の対象となった実際の番組を事例に、その基準を明らかにするとともに、その有効性を、問題性も含めて議論する。本発表を通して、独立規制機関が放送番組における差別是正に果たし得る現代的役割と、その限界を論じることができればと考えている。

東アジア政治運動における「語られる／語る」女性

■ Panelist

陳 怡禎

日本大学

本報告は、2014 年に台湾や香港で起きた社会運動を事例に、政治運動空間のなかで、女性がどのように語られているか、さらに、どのように自らの位置付けについて語るかの二つの側面から、政治運動に参加する女性たちの表象と語りの能動性に注目した。

本報告ではまず、新聞記事などの二次資料への分析を用いてそれら二つの運動における女性表象について検討した。その結果、男性支配の社会空間、さらにその男性支配の力構造が複製されたひまわり運動や雨傘運動の空間において、女性参加者が「女神」と呼ばれたり、「少女」として表象されたりしたことによって、「社会運動参加者」という男性を中心としたコミュニティから周縁化されていたことに照準し、こうした「語られる」女性像の両義性——女性は男性中心の社会運動という構造から他者化、周縁化されるのだが、それは「無力化」と同義するとは限らないこと——を指摘した。

次に、本報告は、実際に台湾や香港の社会運動に参加した女性たちに対するインタビュー調査を通じて、彼女たちは、どのように自分の社会運動空間のなかのポジションを「語る」かについて考察し、社会運動に参加した台湾や香港の女性たちが、周縁化されたことを巧みに用いて、戦術／戦略的に男性支配の社会運動空間から距離を取って周縁に立っていたことを明らかにした。

こうした「語られる／語る」女性に関する言説の二重性を検討することを通して、本報告は、東アジアの政治運動における女性の政治運動実践のジレンマを解明し、女性たちがいかにそのジレンマを乗り越えるかを明らかにした。

残酷なウェルビーイングと冷たいケア ——ポストフェミニズム状況の強化から感情の商品化へ——

■ Panelist

徐 姝琦

名古屋大学大学院

加速社会を主導する新自由主義型資本主義の体制は、人々の生産性や成果を高めるために感情を資源として利用する。とくに自分の感情をうまく管理できることが評価され、それによって成功や自己実現、幸福の追求が強制される傾向が高まっている。他者の存在を顧みず自己中心的となるような、主体性の表現としての感情管理が求められている。その結果、人の感情に対する疎外と搾取は、消費主義を重視する経済関係や不平等な権力関係といった「外部」からだけではなく、むしろ最も程度のひどい搾取は、自分自身の「幸福」・ウェルビーイングのためと称して主体の「内部」から行われるようになってきている。

フェミニズムの状況、とくにポストフェミニズムの状況下では、そのような新自由主義的かつ自己中心的な特徴が現れる。こうした状況に対して、近年、フェミニズムの側からは「ケア」（倫理・労働）への注目が集まっている。とりわけ、「ケアの商品化」に対して「ケアの脱商品化」を重要視する議論が出てきている。しかし、「ケア」は多義的であり、一般的に「ケア」と言っているだけでは何が「商品化」されており、何が「脱商品化」されるべきなのかが、明確になっていない。

そこで、本報告では新自由主義的なポストフェミニズムに抗して、「脱商品化」されるべき「ケア」の内実を特定することを目指す。ケアの商品化で問題になっていることは「感情の商品化」であり、ゆえにケアの脱商品化とは「感情の脱商品化」である。なぜなら、「ケア」は多義的・多面的だが、その一つの次元として、感情の次元があるからである。この観点からすると、新自由主義の影響でポストフェミニズムの問題は「感情の商品化」にある、ということになる。それは、アーリー・ホックシールドの言う「感情労働」がますます拡大することでもあり、このことはエヴァ・イルズの「感情資本主義」の議論を参照することで、より明確になる。

現代美術におけるポストフェミニズム ——芸術関係者の語りから——

■ Panelist

竹田 恵子

東京外国語大学

「ポストフェミニズム」とは、一般的な解釈としては（決してそのようなことはないのに）フェミニズムは目的を達成したため不要とされながら、個々人が能力を競う資本主義社会と福祉の切り詰めによって、女性同士の格差が増大し、個々人が連帯しにくい状態を示す。ただし本発表ではその内実も含めた検討を行う。

ジェンダーの視点からの美術研究は、国内外で主に教育史、社会史の観点から行われてきた。広く知られた論文（1971）においてリンダ・ノックリンは、女性が独立した美術家になることのできない教育制度や社会的慣習があったことを指摘している。日本においても、戦前の女性に対する美術教育は男性とは異なる「良妻賢母教育」にあたり、独立した芸術家になることが決して推奨されなかった。さらに現在の見かけ上の男女平等の下には慣習的にそのような制度が残存することが指摘されている（山崎 2010）。また、美術を含む音楽、演劇、舞踊などのクリエイティブな領域に関わる労働が、現代日本における労働問題を先鋭化していることが、近年社会学を中心に研究されはじめた（吉澤 2014）。ポストフェミニズムの代表的な論者アンジェラ・マクロビーは近年の若者の労働が本質的にクリエイティブな労働のように不安定であることを指摘する（McRobbie 2016）。

本発表では、日本の芸術関係者へのインタビューをもとに、日本におけるポストフェミニズムの様態が芸術関係者にとつてどのように経験されているのかの一端を明らかにする。

Session F	教室510	15:00-17:00	Japanese
-----------	-------	-------------	----------

■ Chair

齊藤 正美

富山大学

「推し活」から超高関与消費者へ： 宝塚ファンの事例からみる女性ファンの実践

■ Panelist

バラニャク平田 ズザンナ

お茶の水女子大学

近年、「推し活」という推し（＝最頂）を応援するために行うファン活動の現象はメディアによって頻繁に取り上げられるようになった。メディア言説において、社会的孤立などのネガティブなイメージを持っていたオタク文化とは対照的に、推し活は日常生活の不安や気苦労から逃避への肯定的な自己表現の手段として注目されている（NHK ニュース 2022）。この変化をもたらした背景には、女性ファン独自の超高関与型の消費活動に依拠する経済的な側面と、それを促す関連産業の動きがあると考えられる。しかし、国内外の先行研究において、女性ファンを中心とするファン文化への注目がいまだに少なく、ジェンダー視点を用いる分析がほとんどない。

本研究は、超高関与消費者（和田 2015）として捉えた宝塚ファンの事例を中心に女性ファンの長期的な活動に焦点を当て、推し活に参加するファンの実践とその活動に伴うファンコミュニティとの関係性の分析を試みる。まず、ジェンダー視点を用いて、推し活に関する新聞報道の言説分析を行い、この現象のジェンダー化の傾向を明らかにする。その上で、兵庫県宝塚市で実施した参与観察調査、及び 13 名の宝塚ファンを対象に行ったインタビュー調査の結果を踏まえ、超高関与型ファンの推し活を描き出す。

その調査結果を通じて、長期的な超高関与消費者の宝塚ファンの推し活は、日常生活の中に習慣化され、情緒的な癒しの役割を果たしていることを確認できた。しかし、本研究の結果により、これまで推し活の現象に重要視された「お金」という経済的側面だけではなく、それぞれのファンが独自で推しを支援するために費やす自らの「時間」という側面が長期的な関与度を確保するために必要不可欠な様相であるということが明確になった。したがって、推し活に参加する超高関与型の女性ファンは、お金と時間を費やすことを通じて、推しに貢献、これは愛の労働と捉えられる。

宝塚歌劇の二次創作：「女性向けの物語を女性が作り替える」をめぐって

■ Panelist

張 嘉慧

神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート

宝塚歌劇における女性の表象と、女同士の関係性の活発な生産と消費は、女性の欲望の経済と視覚化においてエンパワメントの場を提供している。その中で、ファンによる「二次創作」が目立っている。今まで、二次創作のコミュニティの特徴、流通形式、ファンの創作動機などに関する研究が進められた。ただし、宝塚ファンによる二次創作は、「女性による女性向けの物語を女性が作り替える」という特殊性があり、今までの二次創作に関する研究の主な対象の性質とは異なっている。そこで、本研究は、宝塚の二次創作が持つ意味、当事者のアイデンティティとの関係性、そしてこのような二次創作とコミュニティがどのような特殊な機能と構造を持ち、具体的に何を導くのかなどの考察を進めた。

調査の結果によれば、宝塚の二次創作の創作者には、舞台や役者への好意、「“好きだという気持ちを知って欲しい”という主体的な欲望」（石川 2007:90）のほかにも、自身の性的指向に基づいた親密な関係の自給や、関係性を観察する時の理想の視座の確保などさまざまな動機がある。また、協力者が提供した二次創作の内容から見れば、作り手の動機、観る側の視点、関係性のあり方、性・性的指向の選択などの要素は多様化している。創作者は、公式メディアが提供した「真実性を備える」情報、虚構空間の情報、ファンが作り出すイメージと現実とをそれぞれ違う割合で統合させることで、役者同士の関係性に新しい意味を付与する。このように読み替えることは、異性愛規範やジェンダー秩序を揺るがす可能性を生じさせる。女性のみのカンパニーと二元論から逸脱する男役の表象を用い、多様な性・性的指向の組合せを楽しみながら、異性愛秩序における男女非対称的な権力関係と、エロティカにおける女性を性的対象としてのみ描く手法や女性への暴力を排除する。その上、協力者の語りは、この人たちの相当数が性的マイノリティなどである可能性を示している。このような創作は、異性愛秩序の綻びを生じさせるだけではなく、マイノリティによる自己表現、またマイノリティ・コミュニティの形成を促進すると考えられる。

検閲下の参加型文化と「愛国的」なスペクタクルの形成——中国の SNS におけるパフォーマンス的な実践に着目して——

■ Panelist

張 馨予

東京大学大学院

本研究は、中国の SNS での実践に着目し、ユーザーが中国の検閲システムの強圧の中で、どのように「愛国的」なスペクタクルに組み込まれるかを明らかにする。

Web 2.0 の展開と共に、参加型文化と言われるものが特にインターネット上で盛んに見られる。Jenkins ら (2009) が「芸術表現や市民活動への障壁が比較的 low、創作や共有が支持され、社会的な繋がりを感じる」といった特徴を持つものとして参加型文化を描き出したように、今日ユーザー達が何らかの目的に基づいてソーシャルメディアを介して参加することは容易である。しかし、活発な参加が監視に繋がる危険性も秘めている。中国のインターネットにおいては高度な検閲システムによって、発信可能、閲覧可能な内容が限られている。更に、検閲されるユーザーは同時に検閲する行為者でもあるという市民をベースにした参加型監視 (Luo・Li 2022) も形成されている。参加型監視は民間人による通報や報告によって成立し、ユーザーは自らの意志に基づき、当局により検閲され得るものを想像し、「不適切」的な内容や行動を報告する。近年では中国当局による歴史認識、政権や軍人への尊重、中国の領土への合意といったものへの違反を発端とする炎上事件が頻繁に起きるようになり、ユーザーによって告発された人やコンテンツは様々な社会的な制裁を受けている。

このように、国家権力が届かない個人々の言論も監視可能になるため、中国のオンライン空間は親政権的（一般的に「愛国」として解釈される）な空間として構築されつつある。この現象を分析する際に、Abercrombie と Longhurst (1998) が提起した「スペクタクル・パフォーマンス・パラダイム (SPP)」というオーディエンス研究の理論が有用である。SPP の観点では、現代のメディア環境において、人々はメディアを通じて、オーディエンスとして様々なメディアスケープを鑑賞すると同時に、パフォーマンスを行うパフォーマーでもあると捉えられる。SNS 環境において、ユーザーたちは外部のまなざしに向けてパフォーマンスを行う一方、他者のパフォーマンスを観るオーディエンスでもある。

本研究は SPP の理論枠組みに基づき、中国の SNS で告発され炎上した事例（スタンドアップ・コメディアン、アイドル、漫画家など）を紹介する上で、ユーザーがどのように愛国的なパフォーマンスを行い、愛国的なスペクタクルを構成しているかを検討する。

「癒したい」から「癒されたい」へ——雑誌『オリーブ』と映画『かもめ食堂』における「ナチュラル・ライフスタイル」の表象——

■ Panelist

劉 カイウェン

東京大学大学院

映画『かもめ食堂』が 2006 年に公開されて以来、予想外のヒットになった。謎めいた過去を持つ 3 人の女性がヘルシンキで出会う。助け合いながらおにぎりをメインメニューとした小さな食堂を営む。彼女らの物語が多くの観客を魅了したことから、『めがね』（2007）『マザーウォーター』（2010）など、起伏のある展開や分かりやすさを提供せず、とにかく「癒し」の空気感を投げっぱなしにする作品が次々と制作され、一つのジャンルになる傾向もある。これらの映画は、主人公がほぼ女性であること、キャストやスタッフも大体女性陣であること、そして何より女性の観客の間で多くの支持を得ていることから、「女性の癒し」とは言えるだろう。その「癒しポイント」といえば、インテリアが洗練された空間でオーガニックな食事をする、そしてカラフルで着心地のよい洋服を身に纏って自然に出かける、といった主人公たちの素敵な生活ぶりは大きいだろう。しかし、なぜこのナチュラル・ライフスタイルの表象は特に女性観客にとって「癒し」にはなれるだろうか？

そこで、本発表はこういった「ナチュラル志向」と「女性性」の結びつきを 1980、90 年代に人気を博した少女雑誌『オリーブ』まで遡る。ある種「少女的」「ガーリー」なライフスタイルを提示しつつあり、その読者群が「オリーブ少女」と呼ばれるぐらい、『オリーブ』は他の同年齢層狙い雑誌と一線を画した。『オリーブ』の「少女性」を支えるのに、独特な感性や美学以外、おしゃれな洋服や雑貨を選んで買う消費のセンスも大事だった。そして、80 年代末から、「自然ともっと仲良くして、自分のからだも大切にしようよ！」という外部と自分を癒したい「ナチュラル志向」（大塚 1991）も強まってきた。本発表は、『かもめ食堂』と『オリーブ』における「ナチュラル・ライフスタイル」の表象を比較しながら、それぞれに纏わるジェンダー・ダイナミクスとその読者／観客の感情への働きかけを解明する。

Session G	教室505	17:00-18:30	Japanese
<p>■ Chair</p> <p>川端 浩平</p> <p>津田塾大学</p>			
<p>■「性の商品化」をめぐるメディアとフェミニズムの現在</p>			
<p>■ Panelist</p> <p>柴田 英里</p>			

近年、内閣男女共同参画においては、メディアの分野における政策・方針決定過程への女性の参画が促され、「新聞・テレビ・映画・ゲーム・インターネットメディア・広告等の多様なメディア関係者と連携し、男女共同参画に資する広告やコンテンツ等について積極的に情報発信を行う」取り組みが行われている。また、加速する新自由主義やグローバリゼーションを背景に、企業のマーケティングにおいても「フェミニズム」や「多様性の尊重」は一般化している。

フェミニズム議員連盟による「VTuber 松戸警察・交通安全 PR 動画抗議 (2021 年)」、UN Women (国連女性機関) やその関連組織であり、男女共同参画と連携するアンステレオタイプアライアンスによる「日経新聞・月曜日のたわわ広告抗議 (2022 年)」、日本共産党埼玉県議会議員団による「埼玉県県営公園の「水着撮影会」への貸出禁止の要望書 (2023 年)」など、フェミニズム的な性的表現批判・異議申し立ては、一定の権威性を持つようになった。

その一方で、フェミニズム的な言説は、論拠の不明瞭化や、歴史的背景の忘却も引き起こしている。

一例をあげれば、日本共産党埼玉県議会議員団による要望書で論拠として引用された「性の商品化」に関する説明が現在はすでに改定されている 20 年以上前の男女共同参画基本計画 (平成 12 年版) であったことなど、そのリテラシーは再検討される必要がある。

「性の商品化」という定型的な表現は 1980 年代に成立し、ミスコンやポルノグラフィーを批判する際にも引用されるようになった (井上: 1992)。江原由美子によれば「性の商品化」の論理構成は、廃娼論における売買春規定の論点を拡大したものとされる (江原: 1992) リベラリズムやセクシュアリティ研究、マルクス主義フェミニズムなど、複数の立場から批判があり、マルクス主義フェミニズムの立場である上野千鶴子とは大きな論争となった。

「性の商品化」という言葉が近年どのように使用されているかを比較することで、現在の「フェミニズム的な異議申し立て」が内包する性規範がどのようなものなのかを検討していく。

中国における肌見せ系ファッションとフェミニズムの交差点 ——少数民族女性のエンパワーメントの 事例に基づく一考察——

■ Panelist

邱 詩琴

明治大学大学院

ファッションとジェンダーの関連性は中国でも注目されるようになってきたが、肌見せ系ファッションに着目し、若い女性を対象に調査を行い、女性自身の意識に関する研究は未だに十分に成されていない。中国において肌見せをする動機とフェミニズムとの関連性を見出す研究は極めて少ない。

Sheila (2014) は肌見せ系ファッションを、男性の性欲に迎合する理由で、「売春婦のファッション」と指摘した。また、「スラット・シェイミング」を例にして、人々は肌見せ系をする女性を、道徳心が欠如している人だと非難することは少なくない。このように、着用者の真実の動機に注目されることが少なかった。

さらに、女性の従属性を重視する伝統的な儒教文化では、女性の身体を隠していわゆる性的魅力を出さないことは、従属性の重要な表現となる。このように、肌見せ系をする女性は、従属性に対して反抗しようとしている可能性がある。反抗の動機は、フェミニズムの影響と身体解放を求めることとの関連でさらに検討されるべきである。

そのため、本発表では、2021～2022年に得られた雲南省昆明市呈貢大学城に通っている女子大学生20名を研究対象としたインタビューの結果に基づき、調査結果の発表を行いたい。結論として、フェミニズムに影響されたことで他人の(特に男性)視線を恐れなくなったり、自分の身体や女性の生理的特徴を恥じなくなり、自分の身体に自信を持てるようになったりすることは、肌見せ系をする動機の一つであることがわかった。また、雲南省出身の2人の事例において、メイン・カルチャーへの反抗の象徴として肌見せ系をし、ノー・ブラや全裸写真を通してフェミニズムを実践している様子がかがえた。

以上、エンパワーメントとメイン・カルチャーに対抗するための道具として肌見せ系を使っていることが明らかになった。このことは、女性の「見せる」行為をフェミニズム的な実践として解釈する可能性があると考えられる。

映画『春婦伝』(鈴木清順、1965)における トランスナショナルな「慰安婦」表象

■ Panelist

高橋 伸夫

立教大学大学院

この研究は、鈴木清順監督の映画『春婦伝』(1965)における「慰安婦」表象をトランスナショナルな視点から分析するものである。映画『春婦伝』は、原作小説『春婦伝』(田村泰次郎、1947)の主人公であり朝鮮人「慰安婦」の春美を、日本人「慰安婦」の設定に変更し、さらに、つゆ子という別の朝鮮人「慰安婦」を追加することで映画化されている。

『春婦伝』におけるトランスナショナルな側面とは、まず、日本人の春美と朝鮮人のつゆ子の間にある国民国家の枠を超えたシスターフッド的連帯にある。春美とつゆ子のシスターフッドとは、男性中心的な支配の論理のなかで、二人だけはお互いを理解しあっているというような雰囲気のことである。劇中に直接お互いが言葉を交わす場面はないものの、翻案の過程で生み出された春美とつゆ子の間には、弱くはあるが、トランスナショナルな連帯のあることが俳優の身振りに加えて、カメラワークやフレーム構成といった映像表現によって象徴的に表現されている。

また、春美とつゆ子の連帯を描く鈴木清順監督の映画スタイルもトランスナショナルなものである。映画のストーリー進行の滑らかさを優先する古典的ハリウッド映画の規範に対して、鈴木はときにそれに則り、ときに逆行するような手法を用いることで、独自のカメラワークやフレームを構築し、二人の連帯を印象付けるのである。

本研究は、春美とつゆ子という二人の「慰安婦」の表象を、映画の美的側面にも着目したトランスナショナルな視点から分析することで、他者に開かれた「慰安婦」の記憶の共有可能性を検討する。「慰安婦」に関する映画は、当事者の高齢化に伴い従来のドキュメンタリー映画から、当事者が不在となる物語映画の制作が進められている。『春婦伝』は、限定的ではあるがトランスナショナルな「慰安婦」の連帯という側面を映し出す当事者のいない物語映画となっている。この研究における『春婦伝』のトランスナショナル性についての分析は、どのように当事者以外の人間がトランスナショナルなレベルで「慰安婦」の記憶を共有、継承することができるのか検証することを可能にする。

Session H

教室508

17:00-18:30

Japanese

■ Chair

伊藤 守

早稲田大学

インフルエンサーの労働とソーシャルメディア ——エスノグラフィー調査から——

■ Panelist

河合 美侑

泉 小百合

藤田 結子

明治大学商学部

明治大学商学部

東京大学

近年インフルエンサーが職業の一種として注目されている。しかし、その実態はあまり明らかにされてこなかった。そこで本研究では、これまで十分に研究されてこなかったインフルエンサーの労働を調査し、プラットフォーム経済と労働、およびジェンダーについて実証的に考察する。

先行研究によると、インフルエンサーの職業的実態は、無報酬かつ露出や知名度を先延ばしにした長時間労働であることがほとんどである。また、美と女性らしさの伝統的な理想を持ち合わせた個人がブランドのサポーターとして求められ、多くの女性インフルエンサーは、消費と女性らしさの関連について直面し、「女の子とは何か、誰か」に縛られるようになる。(Duffy 2017) 彼女たちが情熱的な仕事をし、魅力的な生活をしているよう演出することは、女性は消費を通して、消費のために働くべきという神話を展開する。これは長い歴史の中で「女性の仕事」とされてきており、過小評価され、無報酬であったが、資本主義的な生産回路を維持するための中心的な役割を担っている。(Duffy and Hund 2015)

以上を踏まえ本研究では、日本におけるインフルエンサーの労働について、米国のインフルエンサー研究の知見と比較しつつ、考察を行う。そこで、インフルエンサーを「将来のキャリアのための運用を含め、職業の一環としてInstagramやTikTok等のソーシャルメディアで発信する個人」と定義づける。インタビューガイドを基に、女性のインフルエンサー数名に半構造化インタビューを行い、コーディングを行い分析した。

その結果、企業からインフルエンサーへの案件、報酬、業務の実情、インフルエンサーの意識などが明らかになった。これらについて、プラットフォーム経済、およびジェンダーの観点から考察し、米国との差異や日本における問題について議論する。

インターネット空間におけるジェンダーとファッションの 関係性の変容

■ Panelist

船戸 杏珠

神戸大学大学院

インターネット空間での人間はいわばバーチャルな存在であり、現実における身体とは別の、「何者にもなれる」感覚を私たちに認識させる。そして実際にポスト・インターネット・アートの誕生によって、オンラインとオフラインの区別は曖昧になり、その曖昧になった境界線の中で作られた「服」は、インターネットの中でイメージが増幅されたものであり、ジェンダーの再編を経験して生まれたものであるといえる。そしてそれは、従来ジェンダーの固定化に寄与してきたファッションが、インターネットとの融合によって、ジェンダーを解放するファッションへと変化することを意味するといえる。そうした背景を踏まえると、ファッションをインターネット以降から現在を含む時代状況を踏まえて研究することが重要であると考えた。こうした背景を踏まえて、実際にVRChat アバターを手掛けるYOYOGI MORIとアパレルブランドであるHatraがコラボして、アパレルブランドがバーチャルの服を手掛けた「NINE HATRA」というプロジェクトをファッションにおけるポスト・インターネットの具体的な事例として中心に研究する。このプロジェクトの中では、本来現実の模倣とされてきたバーチャルから、現実の服が制作されるという流れが生まれている。世界を両者が一体となって作りあげた空間を分析し、またアバターの衣服と実際のファッションの衣服を比較することで本研究の参考にしつつ、インターネットという空間性から身体によって生まれるルッキズムが除外されたことで錯乱し、再編されるジェンダー差を分析し、それが実際の人々が身にまとうファッションにどのように反映されているのか検証する。

ソーシャルメディアにおける視覚的アイデンティティの自己同一性：日韓大学生の「プロフィール画像」と「アバター」の分析から

■ Panelist
久保 友香

インターネット上でのコミュニケーションでは、自分が参加していることを示すために、視覚情報を表示することが標準になっている。

その視覚的アイデンティティに、個人的同一性が必要とは限らない。しかしこれまでは、カメラで撮影することが最も容易で、個人的同一性があることも多かった。でもこれからは、画像生成 AI を使って「〇〇風」になるなど、社会的同一化も容易になる。そのような中、人々は、インターネット上の視覚的アイデンティティに、何を求めるようになるのだろうか。

すでに、ソーシャルメディアを使いこなす若者たちは、個人的同一性にこだわらず、視覚的アイデンティティを複数持って、相手によって使い分け、流行に従って変化させてきた。そのような若者たちからヒントを得ようと思う。

そこで本研究は、第一に、若者たちが、ソーシャルメディア上の視覚的アイデンティティに、「どのくらい個人的同一性を求めているのか?」、第二に、個人的同一性を求めている場合、「どのような社会的同一性を求めているのか?」を明らかにすることを目的としている。

具体的に、次のような方法をとった。第一に、日本と韓国の大学生 35 人を調査対象とし、ソーシャルメディアで現在使用している「プロフィール画像」を提出してもらい、質問紙をもとに今後使用したい「アバター画像」を選択してもらった。第二に、それらの「顔認識性」と「抽象性/具象性」を画像解析した。第三に、「顔認識性」の低い画像、「抽象性」の高い画像に関して、どのような社会的要因、具体的にはどのようなスタイルに従って作ったものなのか、インタビュー調査をした。

それらの結果をもとに、若者たちはソーシャルメディア上の視覚的アイデンティティに「いかに個人的同一性を求めているのか」、社会的同一性が求められている場合「そこにジェンダー、国、趣味などがどう関わっているのか」を考察する。

Session J	教室510	17:00-18:30	Japanese
-----------	-------	-------------	----------

■ Chair
川上 幸之介
倉敷芸術科学大学

ファーリー・ファンダムの脱スティグマタイゼーション：中国の X 大学自主組織に関するケーススタディ

■ Panelist
毛 雲帆
東京大学大学院

近年、ファーリー・ファンダムは Z 世代の間で人気を集めているサブカルチャーとして、中国の主流メディアで取り上げられるようになった。ファーリー・ファンダムに関する先行研究によると、ファーリー・ファンはしばしば、性的逸脱者、社会不適合者、ズーフィリアといったネガティブで不正確なメディア描写によって広まった強い社会的スティグマに苦しんでおり、時にセルフスティグマに繋がることもある。しかし、中国ではファーリー・ファンダムに対する社会的スティグマはあまり見られない。逆説的であるが、中国のファーリー・ファンはスティグマのイメージを逆手に取って自虐的なネタに使うことさえある。この現象の要因を検討するために、本研究では中国北京の X 大学における学生ファーリー組織を例に挙げ、この組織の管理者にオンラインインタビューを行い、プロセス・トレーシング事例研究法を用いた。比較社会研究としては、第一に中国における新しいサブカルチャーとしてのファーリー・ファンダムの全体像のほか、欧米の主流メディアと中国の主流メディアによるファーリーに対する造形の違いを説明する。第二に、ファーリー・ファンダムのスティグマについて先行研究を批判的に検討し、さらにプロセス・トレーシング事例研究法を紹介する。第三に、中国におけるファーリーの存在と発展の実証的な事例として、この学生ファーリー組織を紹介し、インタビュー内容を分析する。最後に、結論及び研究の限界を述べる。本研究は、中国におけるファーリー・ファンダムに関する研究の空白を埋めるものである。

BL は誰のものか? 「BL ファンタジー」にみるジェンダー構造をめぐる闘争

■ Panelist
張 瑋容
同志社女子大学

2018 年に話題となったドラマ「おっさんずラブ」をきっかけに BL マンガの実写ドラマが増加する中で、BL というジャンルの可視化と受容の拡大、及び BL と関わる作り手と受け手の多様化が注目に値する。こうした新たな作り手と受け手の参入を踏まえ、本研究の目的は、70 年代の耽美・少年愛ジャンルから姿を変えながら展開してきた「女性が創る、女性のための、女性が消費する」BL に、再び姿の多様化が起きている渦中において、女性たちの BL の創作と消費を通じて構築された意味を再確認することにある。

本研究はまず、ラカンの精神分析論および身体と欲望をめぐるフェミニズムの論点に基づき、「BL ファンタジー」の構造化を試みた。その上で、BL に関する先行研究を検討することで、「BL ファンタジー」を構成する「象徴界-想像界-現実界」それぞれの構造を解析した。次に、BL マンガという作品、及び BL をめぐる女性たちのファンタジーの考察を通して、BL とそれを生み出す日本社会のジェンダー構造との対峙、攪乱などの相互関係を分析した。具体的な研究方法と対象は次の通りである。BL マンガの分析に関しては、『この BL がやばい』(2008 ~ 2021 年版)の Top20 の作品を取り上げ、男性キャラクターの身体描写の特徴を考察した。加えて、マンガ家 1 名と読者 7 名(女性 6 名、比較対象としての男性 1 名)に対してインタビューを行った。

上記の調査を通じて、以下の結果が明らかになった。女性的要素が盛り込まれる受けの身体は、セックス・ジェンダーの首尾一貫性を規定するジェンダー秩序への攪乱として捉えられるが、攻めと受けの身体の対照的な描写を見ると、逆説的に再生産される二項対立のジェンダー構造も読み取れる。また、マンガ家と読者のインタビューを通して、異性愛中心主義や女性への抑圧を脱構築するユートピアが BL に託されることが明らかになった。しかし、女性キャラクターの不在や受けの女性化の描写により、女性性への葛藤=ミソジニーが無化・転嫁される一方で、こうした戦略自体は女性自身の内面化のミソジニーの反映でもある。まとめていうと、BL は女性に対して抑圧的なジェンダー構造から解放のユートピアを具現化する装置でありながら、この執拗で強固なジェンダー構造に対する女性たちの不断の挑戦でもあるゆえに、ジェンダー構造をめぐる闘争が繰り返され場とさえ捉えられるのではないだろう。

本研究の背景である、近年の BL 実写ドラマの増加は、主流メディアと資本主義が絡んでくるにつれ、BL をめぐる闘争がより一層複雑になりつつある。BL の土壌を開拓してきた女性たちの発言権の維持や、新しく参入する作り手と受け手と BL の意義を共有することは今後注視すべき課題であろう。

ユートピア衝動の表象としての戦闘美少女 ファリック・ガール 概念の理論的考察

■ Panelist
客本 敦成
大阪大学大学院

本発表では、ファリック・ガール概念の理論的意義を明らかにするために、斎藤環の戦闘美少女論を、戦闘美少女イメージに表象されているユートピア衝動を分析する理論として再構築する。

「おたく」文化をはじめとする日本のポピュラーカルチャーにおいて、少女の戦闘描写や戦う少女のキャラクターといった、いわゆる「戦闘美少女」イメージが重要な位置を占めることは、しばしば指摘されている。特に斎藤環はラカンの精神分析を用いて「ファリック・ガール」という概念を提示し、戦闘美少女イメージを分析した。

斎藤の戦闘美少女論は一定の評価を得ているが、先行研究ではその精神分析的側面が十分に検討されていない。そのためファリック・ガール概念の理論的意義は明らかではない。

そこで本発表では、フレドリック・ジェイムソンのユートピア論を用い、斎藤の戦闘美少女論を、ユートピア衝動を分析するための理論として再構築する。そしてこの再構築によって、ファリック・ガール概念の理論的意義を明らかにする。

具体的には「反転したヒステリー」をめぐる斎藤の議論に注目する。斎藤は、戦闘美少女イメージを「反転したヒステリー」として性格づけている。そして「反転したヒステリー」としての戦闘美少女イメージが欲望されるとき、先に欲望されるのは、美少女イメージではなく、美少女の戦闘描写であると主張している。しかし「戦闘」についての理論的分析が十分ではない。

本発表はこうした「戦闘」の含意を明らかにするために、ジェイムソンのユートピア論を用いる。ジェイムソンは精神分析理論をユートピア衝動を有する主体の理論として解釈しているが、同様に本発表では、戦闘描写への欲望をユートピア衝動として解釈する。それによって、ファリック・ガールにおける「戦闘」と「イメージ」の関係を、ユートピア衝動とイデオロギーの弁証法的な関係が形象化したものとして位置づけることができる。

■ Chair

Yoshiharu Tezuka
Komazawa University

Ageism: Another Otherness Boundary Made Visible Through the Lens of 'Plan 75'

■ Panelist

Lee Da Seul
Waseda University Graduate School

The issue of ageism in society is no longer an imaginary crisis, but one that requires immediate attention. Aging emerges as another dimension of otherness in our society – an exclusionary attitude valorizing elders based on their economic contributions and adaptability to technological literacy. The imbalance of the population pyramid illustrates the strain elder groups' social dependency places on younger generations. This attitude might negate the time and process of aging, turning it into a potentially traumatizing context for society and leading to the segregation of elders. The media primarily focuses on welfare policies from a capitalistic perspective, often neglecting to frame ageism as a critical issue requiring intergenerational communication and collective social consensus. While financial support facilitates immediate care, it metaphorically sits at the eye of the "ageism-typhoon." Societal bias and the tendency to limit elder needs to mere financial deficits remain unaddressed. Plan 75, a film directed by Chie Hayakawa, captures the societal dilemma of an aging population in Japan. Cinematic narratives portray the reactions of various interest groups to the government's controversial plan offering legal euthanasia to those over the age of 75. The moral justification for this radical solution was based on society's assumption of elders living in solitude and social exclusion, leading to questions of whether the policy offers a choice or coerced suicide. This presentation deconstructs narratives around the implementation of Plan 75 and examines how ageism is addressed through the lens of Plan 75. It contextualizes the importance of active communication and sharing thoughts and emotions to foster cognitive and emotional empathy among generations, moving beyond sociocultural prejudices and discussing appropriate policies. To mitigate the social fractures caused by the ageism-typhoon, we need to refresh our societal attitudes, recognizing that understanding aging requires a humanities perspective.

Intellectual Refugee, Identity Formation, and Decolonizing Production of Knowledge: An Auto-ethnography

■ Panelist

Aldrie Alman Drajat
Kobe University

This presentation aims to initiate a discourse on knowledge production within Global South nations, focusing specifically on Indonesia in the context of my research. In Indonesia, the production of knowledge concerning the LGBT community lacks objectivity and tends to pathologize LGBT individuals as individuals in need of a cure. Moreover, identifying oneself as a "gay scholar" in Indonesia presents various challenges, risking both personal well-being and institutional reputation. As part of my current research, I am engaged in an autoethnographic study that seeks to explore the formation of a gay identity in the global South, specifically in Japan.

Throughout this presentation, several key points will be emphasized. Firstly, the sociopolitical landscape in Indonesia significantly influences the process of knowledge production concerning gay individuals, encompassing elements such as discourse wars, persecution, and my personal status as an "intellectual refugee" in Japan. These insights are drawn from relevant academic publications in Indonesia that address LGBT-related topics, net activism, as well as my own experiences as a gay scholar transitioning from Indonesia to Japan. The findings derived from this initial point will serve as a foundation for the subsequent section.

The second focal point centers on personal experiences contextualized within the framework of identity formation. In addition to reflecting upon my own experiences, I will incorporate data obtained through interviews and organic conversations with fellow gay individuals in physical and online realms. These qualitative data sources will enrich the discussion and provide further depth to the exploration of gay identity in the global South.

Lastly, this presentation will argue for the significance of reevaluating gay identity from a global South queer perspective to address the void in knowledge production concerning LGBT issues, specifically pertaining to gay individuals, in global South countries where the criminalization of LGBT individuals prevails. The implications of this research extend to the utilization of autoethnography as a decolonizing tool within the realm of knowledge production.

Session L 教室505 12:00-13:30 Japanese

■ Chair

竹田 恵子
東京外国語大学

境界からの離脱・解体：パンデミック下におけるアジアの木版画実践

■ Panelist

江上 賢一郎
東京藝術大学

2000年代から2010年代にかけてアジア各地の文化労働者、非正規労働者、活動家、学生たちの一部はオルターグローバルイゼーション運動の影響を受けつつ、国境を越えた交流・ネットワークを作りだしてきた。彼ら／彼女らは、相互交流による固有の文化行動主義（Cultural Activism）の実践や集団的な創造実験、文化インフラを生み出してきたが、同時にそのアンダーグラウンド性、また言語や文化、移動の制限ゆえに、そのネットワークを総体的に把握、その共通性について論じることがこれまで困難であった。

本発表では、このようなネットワークのなかでも2010年代以降アジア各地で再出現した木版画制作の実践とそのネットワークに注目することで、国境を超えて展開するアジアの文化行動主義の越境性、その共通性とジレンマについて検証するものである。ケーススタディとして、今年5月に東京藝術大学で実施したアジア木版画展「解／拆境界 亞際木刻版画實踐」(脱境界:インターアジアにおける木版画実践)を取り上げ、2010年代以降のアジアのトランスローカルな文化と政治の結節を、木版画という表現メディアを通じて可視化することの意義について論じる。同時に、集団的な芸術表現や、社会的・政治的な批判意識と芸術文化の結びつき、またそれぞれの作品の背後にある集団的想像力や社会的問題意識の投影のあり方の共通性と差異についても分析を行う。

本展覧会ではアジア各地から12の作家・活動団体による木版画作品が展示されたが、2020年に始まったパンデミックにおける「境界」(人やモノの移動を一元的に管理する国境の問題や、差別や排外主義などの社会的、心理的な排除や断絶の問題)が主なテーマとなっており、境界からの離脱・解体を志向するトランスナショナルなアジアの文化＝政治実践が、コロナ期に被った変化、動向にも注目する。また会期中に行われたシンポジウムやインタビュー、出版物の分析を通じて、木版画の実践と展覧会が、「アジア」という地理的／政治的概念への批判的認識を共同で刷新しようとする試みであったことを論じる。

1970年代イギリスのコミュニティ写真——社会主義フェミニスト写真家集団ハクニー・フラッシュャーズ・コレクティブについての一考察——

■ Panelist

田尻 歩
東京理科大学

本発表では、1970年代のイギリスで、商業写真や写真ジャーナリズムに対するオルタナティブとして模索されていた草の根の集団的ドキュメンタリー実践である「コミュニティ写真」を取り上げる。生活と政治を結びつけるフェミニズム運動から影響を受けたこのコミュニティ写真は、地域の人びとに撮影や現像といった写真に関わるスキルや機材・設備を共有することで、彼女たちが自分たちでみずからの生活状況や関係を撮影できるようになるのを目的としていた。他者によってではなく自分たちで身近な生活環境や人間関係を表象することを通して別の視点で自分たちを見る方法を学び生活に対する自律性を取り戻すことが目指され、社会的交流を生み出す制作の過程そのものが政治的なプロセスになると期待されていた。本発表ではこのコミュニティ写真のひとつの具体例として、社会主義フェミニストの女性たちから成る「ハクニー・フラッシュャーズ・コレクティブ」の活動と作品を分析する。美術館で展示される芸術ではなくアジプロの制作を目的としていた彼女たちは、メディアにおける女性の表象のあり方を批判する形で、不払い労働も含むあらゆるタイプの女性の労働を取材した《女たちと仕事》(1975)、育児サービスの不足と女性の抑圧を問題化した《赤ん坊を抱いているのはだれだ?》(1978)を制作し、労働組合のホールや市民会館などで展示した。前者の作品においても「ストレート」な記録的写真だけでなく統

計データや扇動的なキャプションが組み合わされていたが、後者はさらに広告を転用したモンタージュや漫画も取り入れ、女性たちを従属させる経済的・社会的関係をも可視化しようとした拡張的なドキュメンタリーの形式をなしている。この発表では、コミュニティ写真という発想が出てきた1970年代イギリスの社会状況・条件を踏まえ、ハクニー・フラッシュャーズの活動とドキュメンタリーの戦略、その現代的意義について考察する。

スケートボーディングが削り結ぶアレンジメント

■ Panelist

鍵谷 開
株式会社 Groofy

現在、アーバンスポーツツーリズムと呼ばれるスケートボードをはじめとした都市型スポーツによる地域活性化がスポーツ庁を中心に推進され、公共事業としてもスケートボード専用の施設であるスケートパークの建設が日本中で活発に進められている。この取り組みを通して、これまでスケートパークの不足により街中でのスケートボーディングを余儀なくされてきたとされる既存の「ストリートスケーター」たちの受け皿を作ることが同時に目指されてきた(スポーツ庁2020)。しかし、スケートパークの増設というスケーターのための動きによって、ストリートにおけるスケートボーディングはその規範からはみ出した「迷惑行為」として今まで以上に可視化されることとなっている。つまり、スケーターのために環境が整備されればされるほど、スケートパーク外でのスケートボーディングは抑圧されるといった、スケートボードを取り巻く社会的包摂と排除は複雑に絡み合っているのである。

ここである疑問が生じる。なぜ、スケーターたちはスケートパークという誰からの注意を受けることもなく安全にスケートボードを楽しめる空間を差し置いて、街という人々の日常空間へと流れ、滑り出していくのだろうか。この疑問へのアプローチとして、本発表ではスケートボーディングというある種の身体実践におけるスケーターたちの身体を、身体とモノと環境の「アレンジメント」(古川2020)を取り結ぶ過程で形成される「社会身体」(body social) [箭内2017, 2018]として概念的に捉えることを試みる。これは、ストリートスケートを単なる文化実践として認識論的に描くことによる対象の安易な差別化を避け、身体とモノと環境の次元からスケートボーディングを関係論的に考察する人類学的試みでもある。このような立場から、スケートボーディングがいかにスケートボードというモノ自体を含むあらゆる存在との連続かつ動態的な関係性のなかに展開されているかを明らかにし、スケーターたちの社会身体そのものが流動的に変化していく具体的な様相をフィールドワークとその過程で得られた映像をもとに描き出したい。

- ・スポーツ庁2020 「(資料4) スケートボードから見るアーバンスポーツツーリズムの可能性と未来 (西川委員)」
最終閲覧日 2023.5.28, from https://www.mext.go.jp/sports/content/20210112_stiiki_000012126_04.pdf
- ・古川不可知2020 『「シェルパ」と道の人類学』 亜紀書房。
- ・箭内匡2017 「多自然主義を超えて——自然と身体の人類学のための一考察」『現代思想3月臨時増刊号 人類学の時代』45(4):192-208。
2018 『イメージの人類学』セリカ書房。

Session M 教室508 12:00-13:30 Japanese

■ Chair
山本 敦久
成城大学

『ブラック&クィア』—— ニューヨークにおけるディスコとクラブ・カルチャーの発展 ——

■ Panelist
岸田 健人
神戸大学国際人間科学部

1969年にニューヨークで発生したストーンウォールの反乱に象徴されるゲイリベレーションの広がりとはほとんど同時期に、「アメリカで最初のまったく拘束のないゲイ・クラブ」と称される〈サンクチュアリー〉がマンハッタンに誕生した。このゲイ・クラブでもプレイしていたDJのフランシス・グラッツは二台のターンテーブルとミキサーを駆使し二枚のレコードをミックスすることで永遠のグルーヴを創出することのできる最初のDJであり、ディスコ・カルチャーの発端の大きな要因となった。同時期にデヴィッド・マンキューソは、〈ロフト〉にて最高のサウンドシステムを整え、独自の選曲を通して平和的で理想主義的な場の雰囲気創出を行った。これらのクラブではパーティに来る大半の客は激しい差別や抑圧を受けていた黒人やヒスパニックのゲイであり、日常からの逃避やその空間で得られる快楽を求めた人々だった。本発表ではフランシス・グラッツやデヴィッド・マンキューソらのDJに焦点を当て、彼らがどのようにしてニューヨークにおけるディスコやクラブ・カルチャーの発展の立役者となったかについて見ていく。1977年に公開した映画『サタデインナイト・フィーバー』がディスコを広く周知させることに貢献した以前に、彼らが「ブラック」で「クィア」な人々の発信場となった文化へどのようにして寄与したかを、クラブの描写や本人の証言などから明らかにする。当時の『ニューヨーク・タイムズ』や『ローリング・ストーンズ』、『レコード・ワールド・マガジン』などといった雑誌、そしてアンドリュー・ホーランによるディスコ小説『ダンスからきたダンサー』の言説をもとにこれを検証する。最後に、このクラブ・カルチャーが抑圧されたマイノリティの逃避や快楽への希求を通じて、白人社会における規範に対抗する文化であったことを主張する。

「少子化」社会における「お腹の赤ちゃん」をめぐる政策と宗教右派

■ Panelist
斉藤 正美
富山大学

中絶見直しを主張する際に「少子化」を名目に掲げることがある。1970年代には宗教団体「生長の家」（当時）が出生率の低下などを問題として優生保護法の経済的理由を削除しようとする動きをしていた。最近では2021年に「旧統一教会（世界平和統一家庭連合）」の関係団体が、優生保護法の経済的理由を「胎児の生きる権利」を起点として見直すべきだという論者の講演会を、富山県、東京都などで展開していた（斉藤 2022）。旧「生長の家」と旧統一教会の動きは「少子化」の解消を目的に掲げていること、生命観・家族観などに独自の思想を持つ右派系宗教団体（宗教右派）であるという点で共通している。最近、中絶に関する政策をめぐるカトリック系の病院や医師と連携して積極的に動いている団体にNPO法人「生命尊重センター」がある。関連団体には、円ブリオ基金センターや「いのちを考える会」などの名称の団体が各地にある。この団体は、2022-3年に経口中絶薬の承認の際に議員らと連携し積極的に反対活動を行った。2017年石川県加賀市が「お腹の赤ちゃんを大切にす加賀市生命尊重の日条例」を制定した際にも連携していた。近年妊産婦への給付金を「お腹（なか）の赤ちゃん」と銘打って「お腹の赤ちゃん（胎児）」に対して出す政策が、石川県小松市、富山県高岡市などで実施された。「生命尊重センター」系の団体も一部でこうした政策の要請を行っている。

ここで本報告では、「お腹の赤ちゃん」という表現に着目し、その表現を使って実施されている「胎児」に関わる政策がどのように行われるようになったのか、またそれらの政策に宗教系団体がどのように関わっているのか、を検討する。具体的には、「お腹の赤ちゃん」に関する施策を実施している自治体の議会議事録及び、「生命尊重センター」及び関連団体の機関誌・ブログ等を調査し、関係者への聞き取りも行う。人口減少社会において胎児への政策が「お腹の赤ちゃん」という表現で進行している現状を明らかにし、性の自己決定権という観点から考察を加えたい。

性的マイノリティの食卓と家族 ——マンガの実写化作品から——

■ Panelist
堀 あきこ
関西大学非常勤講師

食を扱うマンガは、料理バトルやグルメをテーマにしたものや、レシピを組み込んだ作品もあり、多様な表現やテーマが生まれ続けている人気ジャンルである。マンガは他の表現に比べ単純な線で描くため、料理を描くには不利な表現方法であるのだが、もう一つのマンガの特徴である絵とストーリーの融合という構成によって、料理を取り囲む物語が読者の想像力を喚起してきた。その魅力もあり、食を扱うマンガはしばしば、実写化されてきた。しかし、食を扱うマンガの多くで、プロの調理人は男性が担い、アマチュアとされる家庭での料理は女性が担っている。食卓に載る料理には「母の味」「家庭の味」といった言葉が用いられ、プロの料理と線引きされると同時に、家族との繋がりが自明視される。そして、料理/家庭と女性の関係が論じられる際、念頭に置かれているのは男女カップルであることが多く、ジェンダーやセクシュアリティの多様性という視点から家庭料理の考察は、まだ十分に論じられていないといえる。本発表では、①マンガが実写化される際に、料理と料理を取り囲む物語がどのように演出されているのか、②男女のカップルと血縁関係のある子どもで構成される近代家族ではない家族、たとえば、日本で法律婚が認められていない性的マイノリティの家族の食卓はどのように描かれているのか、という視点から、視聴者に届けられるイメージの意味内容を考える。取り上げるのは、多様なセクシュアリティのあり方と食卓のシーンがあるマンガのうち、実写化された作品である。「母の味」「家庭の味」というステレオタイプからはみ出る料理はどんな料理なのか、それはどのように演出されているのか、作品の中でどのような意味を与えられているのか、原作と比較しながら考察を行う。

Session N

教室510

12:00-13:30

Japanese

■ Chair

稲垣 健志

金沢美術工芸大学

日本浪漫派から現代へ——ロマン主義的心性の系譜——

■ Panelist

白石 江里香

神戸大学大学院

申請者の発表テーマは仮題『日本浪漫派から現代へ——ロマン主義的心性の系譜——』である。先行研究は『嗟う日本の「ナショナリズム」』（北田暁大、2004）などに代表され、同書では、70年代のあさま山荘事件から90年代の「にちゃんねる」の登場までを、コジェーブによる日本の形式主義批判などにも拠りながら、「アイロニー」の精神史として描いている。

しかし、ここで問題とされているような i 『『感動』と『嗟い』』、ii 『『世界』と『実存』』のようなアンチノミーの構造は、なにも60年代安保の精神から70年代が受け継いだものではない。北田は、コジェーブの議論に拠りながら、この構造がもつと前から存在する可能性に言及しているが、コジェーブの議論の脆弱性などから、それを前面化するに至っていない。

そこで、申請者が「新しい戦前（中）」をテーマに掲げる本学会で試みたいのは、まさに「アイロニー」をその方法とし、国粋主義イデオログの役割を果たした『日本浪漫派』までその起源を遡ってみることである。

『日本浪漫派』を戦後に批判した橋川文三（1920-83）は、同雑誌に代表されるような国粋主義イデオログに対する批判を通して、i 天皇という存在のアイロニーが方法論となっていたこと、ii 天皇制のもと、「私」は社会の一員たる「個人」ではありえず、社会を経由することなく「天皇制」というフレームに吸収されていったことを指摘した。

i について、この共通了解としてのアイロニーという方法は、この本で北田が指摘してきたことであり、ii について、この「天皇制」という「宇宙」に無媒介に「私」が接続していく姿勢は、まさに東浩紀が議論してきたような「セカイ系」の系譜に連なるものとは言えまいか。

橋川は戦争の「反省」の仕事の不徹底を執拗に批判し続けた。「新しい戦前（中）」を考えるこの機会において、——サブカルチャー研究にも拠りながら——彼の仕事を死後40年後に批判的に引き継ぐ、という挑戦をしてみたいと考えている。

中上健次作品におけるクレオール性について——「文学」で差別を「語る」こと——

■ Panelist

鈴木 華織

法政大学大学院

中上健次が喉から手が出るほど欲しかった谷崎潤一郎賞を逃した理由に、選考委員から出された「作品に使われている日本語がおかしい」という意見があった。中上はこのことについて、講演で〈「書き文字とはまるで無縁の世界から来た」自分には「越えられない壁がある」〉として悔しさをにじませているが、その悔しさには出自への想いが潜んでいた。中上は、出自である被差別部落にいた文字が読めない代わりに土地の神話や伝説、そして自身の〈歴史〉を豊かに語る女性らに囲まれており、彼女らをモデルとして様々な作品に登場させている。そのようなこともあり、作中で展開される話しことばの否定は中上のプライドを大きく傷つけたものであったが、そのような「語り」に重きを置いた中上の作品と類似点が多い海外文学にカリブ海のフランス海外県小アンティル諸島、そのなかでもマルティニク島を中心に興ったクレオール文学がある。これまで中上健次の作品と海外文学との比較は、ウィリアム・フォークナーや、G・ガルシア＝マルケスに代表される米国及び南米文学が中心となっており、被差別の歴史とその歴史に関わる口承の文化という共通する要素がみられるクレオール文学との関係を論じた論考はまだ少ない。

本発表は、クレオール文学と中上作品の特性を明らかにし、具体的な作品として中上の連続短篇集『千年の愉楽』（1982年）と、クレオール文学で初のゴンクール賞受賞作となったパトリック・シャモワゾーの『テキサコ』（1992年）を取り上げて、女性（老婆）の語り、（男性作家の）聞き書き、被差別の共同体の年代記といった共通点から、「文学」作品として単なる差別の歴史や実情の告発に留まらなかった両者の比較を行う。

日本の女性誌業界におけるジェンダー化：雑誌の作り手の語りから

■ Panelist

加藤 穂香

国際基督教大学大学院

本発表は、週刊誌やファッション雑誌などの女性誌の作り手に注目する。彼女ら／彼らの労働実態に関する語りの分析を行うことで、日本の女性誌業界において、Acker（1990）が議論するような組織の構造レベルでの「ジェンダー化」が起きていることを議論する。

女性誌は、女性のライフスタイルや生き方を提案する雑誌として1970年代より興隆し、世代ごとに多くの読者を獲得してきた（古田2008）。日本の女性誌の研究では、たとえば誌面におけるジェンダー表象の分析（井上ほか1989; 田中・高馬2020）が行われてきた。

一方で、女性誌を生み出す作り手側についての研究は少ない。女性誌業界の主な担い手は女性であるが、ここで特に注ぎたいのは、この業界においてフリーランスのライター、アシスタント、編集者が珍しくないことである。たとえば女性週刊誌において女性のフリーライターは、決して高いとはいえない原稿料で、締め切りまでの限られた日数での取材活動を行ってきた。過去の記事では、体力勝負な仕事のため「（フリーの）女性記者は三十歳が停年」（穂高1983: 30）という言葉すら見つかる。現在女性誌業界でフリーランスとして働く人々も、公的保障において脆弱な立場のもと、ハードワークな業界でのノウハウを学びながら、自らのキャリアを切り拓いていると考えられる。

以上をふまえて、女性誌業界で働く経験を持つフリーランスを含む複数名のライター、アシスタント、編集者の語りを雑誌記事等から入手し、ジェンダーの観点から分析する。女性誌の誌面の作成過程や、社内外の業界関係者とのやり取り、あるいはフリーランスと正社員の分業体制とともに、女性が重要な位置を占める女性誌業界においても、ジェンダー化の作用が生まれていることを明らかにする。

Session 0 教室507 13:30-15:00 English

■ Chair

Toko Tanaka
The University of Tokyo

A Prince-Less Cinderella: Reading the Contemporary Japanese Mother-Daughter Relationship in Himeno Kaoruko's Real Cinderella

■ Panelist

Machiko Iwahashi
Surugadai University

This study will discuss a re-writing of the Cinderella fairytale through the representation by Himeno Kaoruko (b.1958) of a daughter's escape from the oppression of her verbally-abusive mother in the contemporary Japanese family context. Himeno's novel Riaru Shinderera (Real Cinderella, 2010) depicts an eldest 'dull' and 'inconspicuous' daughter, Sen, who is enslaved by her parents to attend to the 'pretty' but 'wan' Miyoshi, the couple's favourite child. Two decades ago, thirty-five-year-old Sen disappeared without a word and has never returned. The novel consists of interviews by a journalist with people who knew Sen. The aim of the journalist – Himeno – is to present the 'real Cinderella' through the narrative of Sen and her 'beautiful and enriched' mind.

From early childhood, Sen knew that her mother disliked her. This was a complete 'mystery' to her. Whenever she felt despair, Sen would retreat to her 'hideout.' One day a magical 'marten-like' creature appeared and offered to grant her three wishes. Rather than expressing the usual desire for marriage, Sen wished for the strength to survive her despairing life. As in Babette Cole's Princess Smartypants (1986) and Malinda Lo's Ash (2009), many retellings of Cinderella depict a woman who, in desiring freedom and independence from her oppressive mother, questions marriage and romance. These narratives generally accept, however, that it is natural and axiomatic for young women to internalize erotic love. Himeno's narrative, on the other hand, overtly interrogates any such internalization by depicting a heroine who is asexual and indifferent to romance. In her study of 'toxic parents,' Susan Forward reports many instances of daughters oppressed by their mothers and whose low self-image results in repressed erotic sensibilities. Referencing Forward's work, this study reads Himeno's narrative as the magical tale of a prince-less Cinderella who seeks to win back her repressed self.

Navigating Globalization: Understanding the Interplay of Women's Sexuality and Ethnic Minority Identities

■ Panelist

Semenova Anastasia
Osaka University

The aim of the paper is to investigate the intersectionality of gender, sexuality, ethnicity, and globalization among the ethnic minority in a multinational state. The Sakha people in the Russian Federation find themselves in a complex position. While they are the titular nation of the Republic of Sakha and the majority, they are also one of many indigenous ethnicities in Russia and, therefore, a minority. With the rise of globalization and the increasing influence of social media, many ethnic minorities, including the Sakha people, fear losing their cultural identity. In a study conducted by Semenova (2023), the representations of "lost" girls and ideal "our" girls in talk shows were analyzed, shedding light on the assumption that Sakha women are responsible for preserving their nation. This assumption justifies male paternalism over their bodies. This study delves into the intersectionality of gender, sexuality, ethnicity, and globalization, as discussed by the participants in an ethnic talk show. It uses multimodal discourse analysis to examine not only spoken language but also text messages from viewers broadcasted during the show and visual data. The aim of the project is to gain insights into how conservative viewers and discussants view their nation and women in the context of globalization and how more liberal-minded discussants challenge male paternalistic views shared during the talk show while constructing modern sexuality. The study's findings contribute to

the ongoing discussion of cultural preservation and women's empowerment in ethnic minority groups. By shedding light on the dynamics observed within the talk show and analyzing the perspectives of different participants, the research provides a deeper understanding of the complexities faced by the Sakha people and contributes to the broader discourse on how ethnic minority communities navigate cultural identity, gender roles, and sexual agency in the era of globalization.

Japanese Anime Franchises as an Example of Transmedia Storytelling

■ Panelist

Tucholski Michal
Rikkyo University Graduate School

This research describes the phenomenon of Media Convergence in the example of Japanese Anime Franchises. It is an attempt to answer the question of Media Entertainment Business' future, and the current state of Media Promotion and relations with fans. The research explains how nowadays Media Industries fight to engage fans by telling stories through multiply media, and how fans respond to such storylling by being creative online and actively producing original content, such as videos, comic books, stories, art, etc., based on official media productions and media franchises.

This research also tackles such topics as copyright infringement, fair use, and the role big social platforms play in providing the fans with the space where they can share their creative achievements with others.

Keywords: Participatory Culture, Anime, Fandom, Media Franchise, Intellectual Property, Copyrights, Media Convergence, Creative Energy

Session P 教室505 13:30-15:00 Japanese

■ Chair

河野 真太郎
専修大学

路上空間におけるラジオ放送の集団聴取実践

■ Panelist

上田 由至
筑波大学大学院

1920年代に本格的な運用が開始されたラジオ放送についてはこれまで多くの研究が蓄積されてきた。そうした研究は、放送された番組の内容のみならず、ラジオというメディアの形式がもつ特異性、それがもたらした新たな時間性、ラジオ網整備の進展、同時代の他のメディアとの関係など、多岐にわたっている。また、戦前・戦中における国家によるプロパガンダへの活用という観点からも、しばしば研究がなされてきた。日本においては1926年の大正天皇不例放送、1928年の昭和天皇大礼放送、1945年8月15日のいわゆる玉音放送といった、ラジオ放送と天皇制の関りについても論じられている。近年ではラジオ放送の送り手による実践のみならず、その受け手側の聴取実践に関する研究、たとえば住居における個人や家族での聴取を前提とするのではなく、街頭や学校での集団聴取に焦点を当てた研究も出てきている。さらに、公園や広場などに設置されたラジオ塔に対しても近年注目が集まっている。

しかし、こうした街頭でのラジオの集団聴取実践も、とくに集団聴取が行われる際の空間性については、いまだ十分に考察されているとは言い難い。メディア史家の佐藤卓己は「ブルジョア的公共性」に対比される「街頭公共性」とともに、ラジオ放送を「ファシスト的公共性」の要素として位置付けたものの、街頭公共性とラジオ放送は切り分けて論じている。しかし、とくに日本を対象にするなら、ラジオ放送を介した街頭公共性についても考察される余地があるのではないだろうか。したがって、本発表ではラジオ放送の集団聴取の舞台である路上という空間に着目し、それを媒介にした人々の参加＝動員の力学を考察したい。

ヒップホップ・デモクラシーの再考 ——ダンスバトル判定制度の公正性と変容——

■ Panelist

黄 柏瀧

神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート

本稿では、ヒップホップのデモクラシーを代表するダンスバトル文化を取り上げつつ、ダンスバトルにおいて B-boy と B-girl のダンス技芸を判定するジャッジの公正性を再考する。また、パリ五輪のブレイクダンス競技種目に採用された国際ダンススポーツ連盟推奨のトリビュームシステムによる反民主主義的介入がダンスバトル文化に変容させるのかを検証する。ヒップホップ文化は、60 年代末終盤を迎えたアメリカの市民運動を引き継ぎ、70 年代各地で発展してきた即興性を重んじる複数の芸術運動の表現がニューヨークの南ブロンクスで統合されたものであり、常に様々な差別問題などを取り上げつつ不平等な待遇を表現する対抗文化として知られている。特にニューヨークにおける公園や市街地の一区域で DJ が音楽を流しているヒップホップのパーティーシーンでは、ラップバトルのほか、ダンスバトルもしばしば見られる。ラッパーとストリートダンサーの優劣を判定するジャッジは、通常技芸が熟達しておりコミュニティ内で尊敬されている者が担当する。ダンサーのパフォーマンスに対する判定はジャッジに委ねられているものの、ジャッジの判定が不公平であれば、「現場」にいるオーディエンスもジャッジの判定に不服申立てをすることができ、ジャッジもこれにより信憑性を失うことになる。こうしたヒップホップのデモクラシーは、ヒップホップ文化が世界中に拡散しても維持されてきた。日本最大級のストリートダンスコンテストである「Japan Dance Delight」や中国のダンスバトルオンライン番組である「這！就是街舞」などにおいても国内外の有名なダンサーをジャッジとして起用し、各地から集まったダンサーたちのパフォーマンス判定を行う。しかし、このように街頭やマスメディアで盛んになったバトルを通じて形成されたデモクラティックなダンスルールは、パリ五輪に向けて導入されたトリビュームシステムによって崩壊していくのではないかとされている。そこで本稿は、トリビュームシステムがヒップホップのデモクラシーにどのような衝撃をもたらすのかを考察することによって、ダンスシーンにおける「新しい戦争」の動向を明らかにする。

性的マイノリティの「名乗り」 ——コミュニティでの生成と実践——

■ Panelist

荒木 生

成城大学大学院

性と生殖の権利が十分に保障される社会を目指すための権利運動という戦いの中で、性的マイノリティは個人的にも社会的にもアイデンティティ獲得の実践を行ってきた。

発表者は、LGBT だけでなくセクシュアリティやジェンダーアイデンティティの「名乗り」を実践する性的マイノリティ当事者へのインタビュー調査などを行い、当事者たちがインターネットで出会った情報をきっかけにして新たな「名乗り」を始めている実態を考察した。そして、性的マイノリティの新たな「名乗り」がアイデンティティ獲得の実践かつ解放運動であること、インターネットを通して今後も活発な「名乗り」と「名付け」が継続するであろうということを示した。

新たな「名乗り」を実践する性的マイノリティ当事者へのインタビューなどから、疎外感や違和感を新たな「名乗り」を通して克服した事例が確認された。その理由を分析すると、「名乗り」を通して自らの存在証明をし、自己理解や他者理解を進めようとしていることがわかった。また、ジェンダーやセクシュアリティの位相では表現できない、ある位相でのアイデンティティが存在することが判明し、その位相が「ロマンティック」であることが明らかになった。さらに、新たな「名乗り」は「性愛」と「恋愛」に留まらず、これまでその価値を歴史的に不可視化されてきた「友愛」の位相においても現れている。

本発表は、性別と性愛の研究に偏っていたジェンダー・セクシュアリティ研究を、インターセクショナルリティ（交差性）の視点から拡張したものであり、「性」をめぐる複雑なアイデンティティを、性別と性愛、恋愛、友愛の四つの位相から記述、分析するものである。

Session Q	教室508	13:30-15:00	Japanese
-----------	-------	-------------	----------

■ Chair

高原 幸子

金沢星稜大学

A セクシュアルから不確定な未来へ

■ Panelist

井村 麗奈

筑波大学

本研究は、セクシュアルノーマティヴィティ（sexualnormativity：性愛規範）による支配と想像力の限界を超えていくために、アイデンティティ・ポリティクス化に抗してアセクシュアル概念を A セクシュアルへと拡張する。これによって、想像力の限界が現れる閉塞した未来観に不確定な嵐を巻き起こすものである。

A セクシュアルとは、現在注目を集め始めている Aro/Ace スペクトラム研究を、性愛規範を軸に拡張し、発展させるための造語だ。ダナ・ハラウェイはフェミニズムの多様性に向き合い、政治的、社会的立場の親近性（アフィニティ）から共鳴関係を探っていくことを提案した。A セクシュアルは、ハラウェイのように、性愛規範に対して「ない」という立場にあるものたちの親近性による共鳴関係を探るものだ。アセクシュアルは、否定の接頭辞 a と sexual によって構成されているが、セクシュアルでは「ない」ということは、単なる欠如を意味するのではなく、性愛規範とは異なるあり方を示していると考えられる。性的であることは、特別な意味の連なりを持ち、特別な地位を与えられているため、セクシュアルの否定はそれぞれの立場で様々な意味を持つ。本研究は、この否定の A に含まれる多様性に注目することで、アセクシュアル研究を拡張する。

性愛規範は、正常さの境界に関わり非対称に働いているため、アセクシュアルの視点だけでは十分に理解できない。A セクシュアルという造語を用いて、性愛規範の非対称性に注目することで、これを前提としている現代社会の問題をあぶりだすことが可能である。そして性愛規範をそれぞれの視点から分析することで、規範の実体を捉えることができる。

また、性愛規範から正常さの承認を得ることは、再生産的未来主義の循環していく未来に居場所を得ることでもある。そのため、A セクシュアルは「未来がない」とも言われてしまう。本研究は、性愛規範に対して「ない」という立場にあるもの、具体的には高齢者と養殖のエビを中心に分析することで、異なる未来の可能性を探っていく。

A ダルトビデオにおける「ほんとうの快感」言説——代々木忠とニューエイジ、画面外の声、ホモソーシャリティ——

■ Panelist

小田 視希

京都大学大学院

本発表では、異性愛男性向けアダルトビデオとその専門誌を中心としたパブリシティにおける男性像を扱う。特に注目するのは、ビデオ最初期から活動する代々木忠監督による作品と、代々木の著作や専門誌による監督のイメージ形成である。

これまで、アダルトビデオにおける男性像はその暴力性が批判されてきた。多くの場合、こうした議論は男性が暴力的な性行為により女性支配を実現できるかのように描いていると論じている。それはアダルトビデオを最初に問題化した 1970 年代の反ポルノ運動から、1990 年代にそれに対抗する形で登場し、アダルトビデオに女性や性的マイノリティの自己表現の可能性を見出したポルノスタディーズまで共通している。

しかし、日本のアダルトビデオに描かれる男性像は、性暴力によって男性的権威を確立する存在ばかりではない。申請者はこれまで、日本ジェンダー学会の 2021、2022 年大会において、アダルトビデオは「覇権的男性性」を体現する暴力的な監督と、「従属的男性性」を保持する性的能力に劣った男優のホモソーシャリティを頻繁に描いていると示してきた。このホモソーシャリティは社会の変化に応答し、男性の関係性を変容させることで男性性の権威を形成し、また防衛しており、アダルトビデオの男性像はその多様性と変化を重要な要素として検討する必要がある。

本発表で扱う代々木は、これまで男性に男らしさから解放されて女性に身を任せる態度と、それによって引き出される「本当の快感」を描く監督ととらえられてきた。しかし、男性に癒しを提供し、解放するという作品や言説は、当時のセラピーやスピリチュアル等の集団技法と結合しつつ、技法を伝える代々木の権威をむしろ強化している。本発表は、代々木による「本当の快感」の探求の分析から、監督とそれに従う男優の「覇権的／従属的男性性」の先駆的図式とその意義を検討する。

Session R 教室510 13:30-15:00 Japanese

■ Chair
大尾 侑子
東京経済大学

“Not My Ariel”: ディズニープリンセスの Reimagining と日本の人種主義

■ Panelist
山本 恭輔
東京大学大学院

本報告は、2023年公開の実写リメイク版『リトル・マーメイド』に対して日本語の Twitter 上の投稿で確認される人種主義的なバックラッシュに着目して言説分析を行うことで、日本の文脈での「ディズニープリンセス」をめぐる人種主義について解明することを試みる。

1989年のアニメーション作品『リトル・マーメイド』のリメイク版として2023年5月26日に北米を含む世界各地で公開された本作は、2019年に主人公のキャストが公式に発表された直後より、人種主義と関連したバックラッシュと隣り合わせになりながら幾度となく話題になってきた。報告者はこれまで、ウォルト・ディズニー・アニメーションスタジオ (WDAS) が描く映画に登場する「ディズニープリンセス」が、ジェンダー描写やその白人中心主義に対する長年の批判を内面化しながら、また同時にフランチャイズ展開やトランスナショナルなビジネス展開の相互作用の中で、限界性を含みながらもより自己再帰的な表象をするようになってきたことを明らかにしてきた。

本報告では、これまでの分析を踏まえ①ディズニー社による2010年代以降のアニメーションヒット作品の実写映画へのリメイク「Reimagining」がどのような位置付けでなされているのかを分析し、また②Twitter上で拡散される作品に対する拒絶的な主張を行う日本語のツイートの言説分析を行う。これらを通して、作り手側と日本のオーディエンス側でどのような齟齬が生じているのかを明らかにするとともに、日本における「ディズニープリンセス」をめぐる人種主義について考える。幼少期の思い出と結びつけられるポピュラーカルチャーに対するバックラッシュを分析することは、人種性を問われることの多くない日本の文脈において、カラーブラインドや白人性のイデオロギーがどのように絡み合っているのかについて考察することに寄与すると期待できる。

多和田葉子「献灯使」における性と身体——ジェンダー・イメージの〈移動〉に注目して——

■ Panelist
斎藤 明仁
上智大学大学院

多和田葉子 (Yoko Tawada, 1960-) は、日本語とドイツ語の二つの言語を用いて創作を行い、現在世界的に注目されている作家のうちのひとりである。なかでも2014年に発表された「献灯使」は、多和田の初期作品からの問題性 (身体、言語、越境) を引き継ぐとともに、現代社会／文学の主要なテーマ (震災、環境問題、ディストピア、ケア、障害など) を極めて多く内包しており、近年の代表作と位置づけるにふさわしい。

本発表では、「献灯使」における身体・性の表象に注目し、その独自のクィアネスについて分析を試みる。まず、多和田のクィア性に関するこれまでの研究状況を概観し、多和田作品を身体・性という視点から分析することの有効性を確認する。次に、「献灯使」のテキストを引用しつつ、多和田独自のクィアネスについて具体的に考察する。その際、以下の二点に焦点を当てる。一つは、身体のモチーフである。本作品は、世代の異なる二人の主人公を軸に物語が展開されているが、両者はいずれも我々の〈常識〉からは逸脱する身体／身体感覚を持っている。それらの異同を確認する中で、特に身体が〈ままならない〉という点が重要であることを指摘する。〈ままならない〉身体への主人公らの語りは、〈常識的な〉身体感覚を転覆させる力を秘めている。

もう一つは、性のモチーフである。本作品では女性／男性から男性／女性へといった性の〈移動〉の描写が散見され、それらは身体描写とともに〈常識〉ではとらえ難いものである。とりわけ、作品内の世界では性の〈移動〉が繰り返し起こり得るということに着目し、それが我々の抱く性イメージを揺らがせ、攪乱することを指摘する。

多和田の作品は、言語・翻訳という視点からの研究も盛んである。本発表の終わりには、性の〈移動〉というモチーフが翻訳、つまり言語の〈移動〉というモチーフとも密接な関係があるということについても考えてみたい。

痛みが歌われるとき——「星の流れに」の流行から「戦争と女性」をめぐる痛みを考える——

■ Panelist
吉野 梢恵
田園調布学園中等部・高等部 教諭

本発表は、歌謡「星の流れに」を事例に、街娼の痛みを歌う歌謡が人々の共感を得て流通することが何を意味するのかを考察するものである。

「星の流れに」は、清水みのる作詞、利根一郎作曲、菊池章子歌唱で1947年10月にテイクレコードから発売された。この歌は一世を風靡し、「戦争と女性」をめぐる悲哀の一つの象徴となっていった。先行研究では流行の背景として、1947年出版界およびメディアの「パンパンブーム」であったこと、そして敗戦後の貧困と混乱のなかで性売女性が少ないことが挙げられている (注1)。つまり、「星の流れに」は街娼たちの痛みを伝えていて、聴き手にとってもその痛みが身近なものであったために、共感され、大流行したと考えられてきた。

しかし、こうした捉え方には問題があるのではないだろうか。痛みに関する議論はさまざまにあるものの、痛みとは主観的なもので他者との共有が不可能であることが基本的な前提となってきたからである (注2)。共有不可能とされる痛みが表象を通じて人々に共感されるとはどういうことか。本発表では「星の流れに」を性暴力や生活の困窮、国家や社会への怒り、孤独や悲しみといった「戦争と女性」をめぐる痛みを表象するものとして解釈する (注3)。その流通を痛みをめぐる一つの現象と捉え、そうした現象がいかなる意味で生じているのかを明らかにする。分析ではエマニュエル・レヴィナスの議論を参照し、歌謡の「音」という点にも注目する。

分析を通して、戦争において人々の痛みが政治、社会、歴史、文化といった文脈のなかで生じるものであることを浮き彫りにする。とりわけ女性は痛みを被りやすい立場に置かれてきたが、「新しい戦前」と呼ばれる現代において女性たちの痛みが適切に伝えられ応答されてきたとは言い難い。「戦争と女性」をめぐる痛みの意味を問うことは、「新しい戦前」を検討するための一助となるはずである。

注1) 「パンパンブーム」として1947年3月号『群像』に田村安二郎「肉体の門」、同年4月にNHKラジオが「ラクチョウのお時」へのインタビューを放送。「星の流れに」流行の背景について菊池清麿『日本流行歌変遷史——歌謡曲の誕生からJポップの時代へ』論創社、2008年、戸ノ下達也編著『(戦後)の音楽文化』青弓社、2016年。

注2) Elaine Scarry, *The Body in pain: The Making and Unmaking of the World* (New York, Oxford University Press, 1985)

注3) 苦しみを政治・社会の構造のなかで生じるものとする見方についてアーサー・クラインマンら『他者の苦しみへの責任——ソーシャル・サファリングを知る』坂川雅子訳、みすず書房、2011年。

Session S 教室507 15:00-16:30 English

■ Chair
Hiroataka Inoue
Kobe University

Steps to a Maverick Ecology: G. Bateson's Revolutionary Epistemology in the Nuclear Age

■ Panelist
Kenji Hasegawa
Graduate School of Tokyo University of Foreign Studies

In the tumultuous backdrop of the 1960s Cold War Era, the sciences were widely repositioning and recalibrating themselves, notably with ecology emerging as a 'big science,' colluding with the nuclear-centric military discourse. Amidst this scientific restructuring, the innovative mind of anthropologist and social scientist, Gregory Bateson, ventured to establish a new epistemological narrative that would stand distinct from prevailing trends. This presentation will delve into the historical circumstances that shaped Bateson's unique formulation of ecological thought, set within this complex era of socio-political and scientific upheaval.

At a time when ecology was becoming established as an academic institution, Bateson, primarily known for his work in anthropology and systems theory, started articulating a holistic perspective on ecology that intertwined biological, psychological, and sociocultural systems. This shift was provoked by two intertwined circumstances. First, a counter-response to the linear, fragmented, and reductionist approach of 'big science,' shaped by the militaristic ethos of Cold War politics, that viewed nature as an object to be conquered and controlled. Second, a need for a theoretical alternative as part of the burgeoning counter-culture movement of the 1960s, yearning for an understanding of the interconnectedness of life against the backdrop of a potentially catastrophic nuclear war. As ecology became financially cozy with nuclear militarists like the U.S. Atomic Energy Commission, and even became to share an epistemological base with them, Bateson had struggled to present a revolutionary picture of nature in order to overcome dominant narratives.

This presentation will explore how Bateson's thought diverged from the mainstream of ecology, favoring a systemic, interdependent, and process-oriented ecological perspective. Uncovering the complex rivalries within ecology that have rarely been studied, you can discover what Bateson was trying to achieve at that time. By weaving these distinct threads of historical circumstances, this presentation seeks to appreciate better Bateson's pioneering contributions and their relevance in today's increasingly interconnected world.

From Dishonorable Body to Transnationally Tolerated Body: The Perception of Kabukicho's Japanese Male Hosting Industry in South Korea Given through Tanaka's Character.

■ Panelist
GU Miyoung
Waseda University Graduate School

This study focuses on how Japanese male hosts in Kabukicho (歌舞伎町ホスト), the largest entertainment district in Tokyo, are represented in Korean media. In Korea, the concept of the male host is unfamiliar. As such, one of the nation's key reference points for this concept is the fictional character of Tanaka, a Kabukicho male host created by Korean comedian Kim Kyung-wook. This character has gained widespread attention on various media platforms and is now considered one of the most popular figures in Korean pop culture. Tanaka's uniqueness has piqued curiosity about the culture of Japanese male hosts and the Kabukicho district as a whole, and how this fits into wider Japanese culture. However, his character is not entirely unproblematic. Questions regarding the nature of his influence can easily be raised. Is Tanaka a virtuous cultural interpreter, or a seditious figure promoting a lowbrow culture of uninhibited sexuality? I will examine how this culture is perceived in Korea by arguing that Japanese male hosts, who are typically depicted as lowbrow or immoral figures, have been transformed into complex, energetic characters through Tanaka.

Session T 教室505 15:00-16:30 Japanese

■ Chair
菊地 夏野
名古屋市立大学

芸術家職の経済的困難という特性が生み出す性差 ——現代日本の美術作家を対象とした聴き取り調査から——

■ Panelist
井上 智晶
東京大学大学院

近年、日本の美術界におけるジェンダー・ギャップの実態に注目が集まる一方で、芸術家職の特性が生み出す性差についてあまり議論はなされてこなかった。

芸術家職において経済的な達成が困難であることはよく知られている。他職業とは異なり、多くの芸術家は芸術家職のみで生計を立てることが非常に困難であり、副業等他の何らかの手段で自身の生活と芸術活動を賄っている (Throsby 1994, Abbing 2002=2007)。日本においても、山本 (2015) の調査ではアーティストとしての年収のボリュームゾーンは 100 万円以下という結果となった。つまり、芸術家職の特徴として経済的困難が挙げられるが、その特性がどのような性差を生み出すのかは明らかにされてはいない。

そこで、芸術家職の経済的困難という特性が生み出す性差を明らかにするために、現代日本で活動する美術作家を対象とした聴き取り調査を行った。女性作家に対する調査は 2021 年 7 月～10 月、男性作家に対する調査は 2022 年 8 月～2023 年 2 月の期間で実施した。調査協力者は美術大学出身者の知り合い、キュレーターに紹介を依頼し、機縁法を用いて募集を行った。調査対象となる美術作家は展示活動を行う作家に限り、演奏や演劇、ダンスなどの実演芸術のみを主な表現メディアにする作家は除外した。調査協力者は女性作家 17 名、男性作家 11 名となっている。

調査の結果、経済的困難という特性によって、美術作家という職業が正統な職業として周囲に認知されないという問題があり、結婚や出産というライフイベントにおいて性別役割分業意識に基づく問題が男性女性それぞれに生じていることが明らかになった。そして、美術作家として活動を継続するために助成金や助成プログラムへの応募が必要とされる。しかし、これらの助成の応募期限が 35 歳～40 歳程度に設定されることが多く、女性の場合はライフイベントとの兼ね合いから 30 代を、男性の場合は応募期限後の 40 代をキャリア継続の壁として捉えていることが明らかになった。

誰にとっての問題なのか ——舞台芸術業界で働く技術職の女性が考えるハラスメント とワーク・ライフ・バランスの対象者設定の違いから——

■ Panelist

高橋 かおり

立教大学

今日の文化芸術業界や創造産業では、#metoo 運動に代表されるパワー・ハラスメントやセクシュアル・ハラスメントの問題化、あるいは過酷な労働環境の改善を進めるワーク・ライフ・バランスの実現の2つの議論が大きな柱となっている。しかし、大きな問題が広く共有される中で、個々人の経験との結びつきに齟齬が生じている状況があるのではないだろうか。本報告では 2020 年より実施している舞台芸術業界で働く技術職の女性たちへのインタビューの結果の分析を行う。舞台芸術は活動のための時間・場所が固定されることから、一度創作が始まるとフレキシブルな働き方が難しいため、一般的な労働条件や規約が通用しない場面が多い。調査協力者たちはハラスメントやワーク・ライフ・バランスを認識していたものの、自己との距離感がそれぞれ異なっていた。ハラスメントに対しては距離化をとる傾向があり、過去の経験や伝聞の語りがあるものの、現在進行中の経験に関する語りを導くことは加害・被害のいずれであっても難しい。他方、ワーク・ライフ・バランスにおいては当事者として語る傾向にあり、むしろ「女性だけの問題」ではなく、「子を持つすべての人」あるいは「男性も含めた問題」として認識され、女性にとっての課題という枠組みが解体される場面が見られた。調査協力者にとって、問題からの距離化や当事者概念の拡張によって、女性であるから不利益や困難を受けているという認識がなされにくいという結果になっているといえる。これは、文化芸術業界における構造的なジェンダー不平等に対するの暗黙の戦略であるともいえるが、各種実態調査やアンジェラ・マクロビーの『クリエイティブであれ』において共有されてきた現状を踏まえても、制度的・環境的な側面からの改善は喫緊の課題であろう。

レズビアン的表現の現代美術制作における女性同性愛美術史 研究の必要性とその美術史における扱いについて

■ Panelist

近藤 銀河

東京藝術大学大学院

レズビアンをはじめとする女性同性愛に関する事柄を現代美術の中で表現しようとするとき、このジャンルの情報へのアクセスが難しいことが制作を困難にしている。このような困難は、現代美術の制作者にとっては理解し得るものである一方、その内実はあまり語られてこなかった。

そこで本発表では美術史と美術制作者がこのような課題に向き合わなければならない理由をアート・ワールドと Cass Identity Model を手掛かりに基礎づけを行っていく。アート・ワールドは哲学者のアーサー・C・ダントーや社会学者のハーワード・S・ベッカーらによって研究された、現代美術の定義や環境についての概念であり、ここでは同時に美術制作の変化の条件も語られている。本発表ではこのアート・ワールド概念をもとに、現代美術制作においてなにが女性同性愛に関する事柄を表現することを困難にしているのかを明らかにしていく。

また同時になぜこうした情報へのアクセスが困難になってしまっているのかを、レズビアン・スタディーズなどの先行研究をもとに整理した上で、Helen Langa の Seeing Queerly という、女性や性的マイノリティに対して抑圧的だった美術史の中でレズビアン的な表現や作家を見出す際にあえて主観性を持ち出そうとする、概念を手がかりにその克服の可能性を考察していく。

Session U	教室508	15:00-16:30	Japanese
-----------	-------	-------------	----------

■ Chair

梁・永山 聡子

1923 関東朝鮮人大虐殺を記憶する行動

ふえみ・ゼミ & カフェ

成城大学

中国のネット小説の書籍化における読者の参与： BL 小説の地下流通活動を中心に

■ Panelist

庄悦

上智大学大学院

中国において、ネット小説を原作としたドラマや映画、アニメは近年、中国の映像コンテンツ市場の大半を占めている。また、中国のドラマ・コンテンツは日本や韓国、東南アジアの動画配信サイトにも登場し、海外市場に進出している。ネット小説の映像化（＝著作権を一部譲渡すること）はすでに大物ネット作者の主な収入源となった。一方、近年、映像コンテンツに対する当局の検閲基準は厳しくなる傾向であり、BL 小説の映像化はほぼ禁止されている。そのため、一部の BL 小説作者にとって、主な収入源は小説投稿サイトの読者からのサブスクリプションとテキストの書籍化だけである。

中国では BL 小説を発禁していないが、検閲を通れば出版できる。それにも関わらず、数多くのネット小説作者は地下的なルートで出版物を読者に流通している。読者も自発的にコミュニティを結成し、書籍の購入活動を行なっている。このような書籍の地下的流通はどのように行なっているのか、そうする理由はなにか、このような活動の意義は何か、筆者は本研究で三つの質問を答える。研究方法は、まず、中国の出版制度と出版の現状を把握するための文献・資料の整理と分析である。次に、SNS で関連する活動を行なっている作者と読者を選出し、DM やコメントで了解を得て、半構造化インタビューを行い、回答内容を分析する。

地下的流通のルートについて、まず、作者は「境外」の出版社を通して、書籍を出版し、読者は自発的に出版社や取次会社に発注し、集団購入で書籍を入手する。このような流通は公式的な輸入ではないため、税関で没収されるリスクが高い。理由として、まずは一貫性を保った書籍を出版することは、最も大きな二つの理由として、作者にとって収入の増加、読者にとって知る権利の保障を取り上げる。書籍の地下的流通で、BL 小説の作者と読者というサブカルの担い手は、メジャーの文化以外に、自分の楽園を作りコンテンツの土地で自由に開拓することができたことと取り上げたい。

「視られること」からの脱却——1990 年代ハリウッド映画に おける「新たな女性映画」——

■ Panelist

橋本 美波

法政大学大学院

本発表の目的は、1990 年代のハリウッド映画において「新たな女性映画（new woman's film/cinema）」と評されたジャンルを捉え直し、その価値を再考することである。「新たな女性映画」とは、女性主人公によって物語が進行し、女性の関心事を主題とし、女性観客に向けて製作された、映画作品およびジャンルを指す用語である。同ジャンルは、1990 年代から 2000 年代にかけては主にインディペンデントな作品として出現したと言われ、これまで大衆作品の存在について、積極的には言及されてこなかった。だが、1990 年代に大衆作品として製作された「新たな女性映画」と呼ばれる作品にも着眼してみると、ハリウッド映画のなかで長きに渡って問題視されてきた女性の表象を巡るジェンダーの非対称性が前景化され、その問題に対して明確に抵抗するような作品が複数登場していることが見受けられる。したがって本発表では、大衆作品として商業的にも成功を収め、かつ女性の客体的搾取を乗り越えた 1990 年代の「新たな女性映画」に着目し、なかでも範例となる作品を取り上げて、分析を試みていく。分析作品は、クリント・イーストウッドによる『マディソン郡の橋（The Bridges of Madison County）』（1995 年）とする。同作は古典的メロドラマの構造を継承しつつも女性の主体的な性的欲望を描写することで、新たな局面を切り拓いたと言えるだろう。1990 年代に登場した「新たな女性映画」は、第三波フェミニズムの流れを汲みつつ「暴力」や「自死」、あるいは「自己決定」といった意志の強い抗議性をもって、女性の主体性を描き出している。このような状況は、映画のなかで女性を「視られるもの」とせずとも商業的成功を収めることができるという、ハリウッド映画製作の暗黙的前提を覆す可能性をも示したと言えるだろう。

ジェンダー平等とスウェーデン映画の質的変容：「99%のためのフェミニズム」に向けて

■ Panelist

テヅカ ヨシハル

駒澤大学

ジェンダー平等先進国スウェーデンの起源は、その高度福祉社会の創設期である 1930 年代に遡ると言われるが、現在に連なる男女の労働参加と子育ての平等を主眼とするジェンダー政策の出発点は、1970 年代の税制および育児休暇制度の改革に求めるのが通常である。そして、これらの改革は、階級間の平等と再分配を主眼とする高度福祉社会の見直しであり、英国の場合と類似の新自由主義的経済政策への転換点であったと見ることもできる。

北欧の小国スウェーデンの映画産業文化は、公的助成金なしに存続し得ない。よって、公的資金の分配を担う Swedish Film Institute (以下 SFI) のポリシーは、映像産業従事者に対して強力な誘導力を持つ。SFI は、「50/50 by 2020」をスローガンに、強力な量的ジェンダー平等キャンペーンを開始した。これは、映画クリエイティブに関する決定権を握る監督、脚本家、プロデューサーの 3 役職について、2020 年までに性別バランスを 50%・50%に誘導するものであった。

本論考の目的は、上記ジェンダー平等への取り組みを概説するとともに、そこで制作された映像作品を分析することによって、当該ポリシーが作品に及ぼした質的影響を考察することにある。ジェンダー平等は、どのような芸術的価値観の変容をスウェーデン映画にもたらしたのか。当該ポリシーの意義を検証するとともに、フェミニスト内部からの批判をも考察する。

ナンシー・フレイザー等は、見せかけの多様性しかもたらないエリート主義的な「コーポレート・フェミニズム」を批判して「99%のためのフェミニズム」を提唱した。これと似て、スウェーデン映画のジェンダー平等は、一部のエリート女性をエンパワーはしたが、それ以上に父権構造と資本主義を補強するものではなかったか。ルーベン・オストランド監督作品「逆転のトライアングル」、Netflix ドラマ「ラブ&アナキー」等の解説を通して議論する。

Session V	教室510	15:00-16:30	Japanese
-----------	-------	-------------	----------

■ Chair

陳 怡禎

日本大学

北朝鮮モザイク壁画における金日成と金正日——肖像の現実性と配慮——

■ Panelist

斉藤 穂高

神戸大学大学院

本研究は、北朝鮮のモザイク壁画を中心に、最高指導者である金日成・金正日がどのように描かれているのか、その表象について整理を試みるものである。その上で、金日成と金正日両者の比較、そして他の社会主義国の宣伝画を通じ、その特徴について整理するものである。北朝鮮において芸術は、最高指導者の権威と神聖を国内外に知らしめるために一つの媒体として機能してきた。平壤の万寿台にある金日成・金正日の巨大な銅像がその代表例といえよう。北朝鮮研究者のアンドレイ・ランコフも指摘するように、北朝鮮はその建国から写真や芸術の力を遺憾無く用いる事で、最高指導者の神聖性を民衆に共有させ、国家統治の正統性を確立してきた特殊な政治文化を有する国家である。

では北朝鮮において、金日成・金正日という政治的人物をどのように表現してきたのだろうか。上述の問いに対して、社会一般で語られている言説としては、金日成や金正日は神格化されているという共通認識であろう。しかし、どのように描かれ、その権威と神聖が演出されているのかについては明確に整理されてはいない。また少ない先行研究においても、金日成の表象にのみ注目が集まってきた。

そこで本研究では、金日成・金正日の肖像の表象分析、そして他の社会主義国の宣伝画との比較を通じ、その両者はどのように描かれてきたのか、その演出された神聖について検討する。なお、指導者の肖像画については、北朝鮮の対外宣伝サイトである、わが民族同士 (우리민족끼리) 朝鮮語版に掲載されたモザイク壁画を中心に検討することとする。

本稿を通じ示唆される事実は、北朝鮮当局といえども、ある程度の「現実性」を保持するような表現方法をとっているという点である。次に、両者の表象の比較を通じ、金正日が金日成の格下に見られないよう、「配慮」が随所に見られることが示唆された。

本研究は、北朝鮮における肖像と権力的一端に迫る挑戦的研究である。

暴動に対する保守主義の論理：マシュー・アーノルドのハイドパーク暴動論は柵を越える権利を止めるか

■ Panelist

安藤 有史

立教大学

暴動には理由＝理性がある。警察暴力、人種差別的取締まり、失業、住宅不足等、暴動は公式の制度的回路では構造的に排除されている不満や要求を表出する政治的手段だ。キング牧師は「暴動は声を聞いてもらえない者たちの言葉だ」と述べ、政治学者のバクラックとバラッツは「暴動は貧者の投票箱」だと論じた。1981 年ブリクストン暴動に対する『スカーマン報告』は、暴動の理由を認めている。警察研究の P・A・J・ワディントンは、こうした立場の学術界における優位を「批判的コンセンサス」と呼ぶ。

ところが現実には、新しい暴動が起きるたびに、政治家やメディア表象は、暴動を道徳的退廃の問題として扱い、政治的抗議性を認めない「法と秩序」の言説を繰り返す。こうした保守的視点の根強さは、おそらくそれに「批判的コンセンサス」を外側から対置させるだけでは、退けることができない。

そこで本報告は、保守的解釈の論理を内在的に読解し直すことで、保守的解釈内部で暴動の理由を理解する余地を探る。具体的には、マシュー・アーノルド『文化と無秩序』におけるハイドパーク暴動論を扱う。アーノルドは 1866 年のハイドパーク暴動とホイッグ的自由主義の風潮を批判して「好き勝手する」傾向に警鐘を鳴らした。無論、ハイドパーク暴動は当時の選挙法改革同盟の文脈で起きた出来事だ。だがそれだけではない。歴史を遡れば、ハイドパークに代表される公園や公共空間、または私有地であっても広大な散歩場所へのアクセス権をめぐるのは、柵を越える権利、不法侵入の物理的権利が争われてきた。マンチェスターの「散歩クラブ」、労働者階級による「集団不法侵入」運動、近年の「ブレイスハッキング」といった不法侵入遊戯まで、メトロポリスの空間奪還の実践は、アーノルドが批判した産業主義的無秩序の一部であるよりも、むしろその支配に風穴を開ける実践であり、彼の文化＝教養に資する可能性が指摘できるだろう。

衛生博覧会における恐怖の情動のテクノロジー

■ Panelist

皆川 勇太

早稲田大学大学院

衛生博覧会とは主に大正・昭和戦前期に日本各地で行われた衛生意識の啓蒙を目的とする博覧会である。衛生博覧会は近代的な博覧会のフォーマットを採用し行政や新聞社、公衆衛生の専門機関の主催のもとで開催された一方、江戸期の見世物小屋と見紛うようなグロテスクな展示物（病者の身体の標本・模型等）を特徴としていた。近代的な博覧会の中に見世物的な展示という前近代的なものが入り込むという構図がそこにはある。

近代の博覧会における前近代的見世物性というテーマは吉見俊哉による『博覧会の政治学』でも描かれているものだ。吉見によれば明治期日本の博覧会において、見世物性を否定する主催者＝政府の意図とは裏腹に観客たちは江戸期の見世物や開帳に対するのと同じ態度で展示を観ていた。

吉見は博覧会で作動する権力について、観客が展示物＝商品同士の記号的関係を読み解くための規律訓練を施すものとしてモデル化した。しかし、このモデルは展示における記号の整然とした配置を前提としており、猥雑な見世物性はそのモデルにおいて中心的な役割を担っていたとはいえない。

したがって、衛生博覧会の見世物的な展示において作動する権力は、吉見の記号論的なモデルでは十分に分析できないものである。展示のグロテスクさが観客を慄然とさせ、恐怖を生み出していたことを当時のさまざまな史料が指摘しているが、この恐怖は展示された病者の身体から観客の身体へと非言語的・非意味的な仕方ていしば感染する情動なのだと考えられる。その恐怖が人々に行動の変容を促すこととなる。

本報告では近年の文化理論の情動的転回 (affective turn) の潮流を参照し、博覧会におけるもう一つの権力のモデルとしてこの恐怖の情動のテクノロジーを位置づける。衛生博覧会における生権力的作用は恐怖に基づく情動的な枠組みによって説明できるということが本報告の主題である。

グループ発表パネル Group Presentation Panel

9.25

Panel 1

教室503

10:00-11:30

Japanese

新自由主義以降のフェミニズムの課題

——消費領域、学術領域、親密圏の分析から——

■ Organizer

中村 香住

慶応義塾大学文学部 非常勤講師

■ Panelists

趙 恵宇

慶応義塾大学大学院

舘 朝凪

慶応義塾大学大学院

大平 莉緒

慶応義塾大学大学院

第二波フェミニズムが一定の成果をあげ、新自由主義が世界的に広がってしばらく経った現在、「フェミニズムなんてもういない」「フェミニズムは終わった」というポストフェミニズム的な認識が人々の間でポピュラーになりつつある。そうした認識が広がる中で、例えば「個人が置かれている状況は、ジェンダーにかかわらず、『自由意思』に基づく『選択』の結果であり、『自己責任』である」といった新自由主義につきものの言説が、現代の女性たちをさらなる困難な状況に陥れてもいる。このパネルでは、消費領域、学術領域、親密圏の三つの領域における実践を分析することにより、ポストフェミニズムの時代に生きる女性たちが置かれた状況とそこから立ち上がる新しい主体性を描き出し、それにフェミニズムがどのように応答できるかを考えたい。

第一報告、趙報告は、中国の消費社会において近年規模が拡大しているライブコマース（リアルタイムの動画配信を行い、配信者と視聴者との双方向のコミュニケーションを行うことによってECサイトでの購入を促す販促手法）の分析を行うことにより、一度はジェンダーによる購入商品の差異が徐々に縮まりほぼ同質化されたかのようにみえた消費領域において、現在再び構築されつつあるジェンダー別の消費者像について論じる。第二報告、舘報告は、現在も続く学術および科学技術分野における女性研究者の少なさはどのような要因から生じているのかを明らかにすることで、ジェンダーギャップの維持・増進を防ぎ、より多くの人々が包摂される社会の実現に貢献することを目的とする。第三報告、大平報告は、性的多様性の可視化が進んでいる現代において、異性愛結婚のような再生産に結び付く関係性ではない関係性に対する注目があることを踏まえ、制度化されない親密性について新自由主義とフェミニズムの視点から論じる。

Panel 2

教室514

10:00-11:30

Japanese

アートにおける子育ての排除を再考する： 作品を生み出す視点と、鑑賞・体験する視点から

■ Organizer

齋藤 梨津子

早稲田大学

■ Panelists

齋藤 梨津子

早稲田大学

坂本 夏海

Back and Forth Collective

本パネルでは、子育て期にある人々がアートの創作や体験から排除されている日本の状況を問題視し、現状分析と課題への取り組みを議論する。フェミニズム研究は、ケアする者が社会的に周縁化され、ケアの価値も貶められてきたことを指摘してきた。アートの場では、子どもにより良い体験を届けようとする子ども向けプログラムや、親と子を一括りにした親子向けプログラムの研究と実践の蓄積がある一方、養育者の創作活動や鑑賞体験の選択肢が子育てを機に狭められていること

は看過されてきた。出産や育児によりアーティストとしてのキャリアを断念せざるを得ないのか。子育て中の人々が体験・参加できるアートは「子ども向け・親子向け」プログラムに限定されてしまうのか。こうした問題は、「こどもファスト・トラック」だけでは解決しない。親と子が施設に入った先に課題が山積している。

Back and Forth Collective メンバーの坂本夏海は、“How Not To Exclude Artist Parents: Some Guidelines for Institutions and Residencies”の日本語訳や、『子育てアーティストの声をきく』プロジェクトを展開してきた。本パネルでは子育て期にあっても活動を妨げられない環境整備を、アーティストの立場から模索してきた活動の成果と課題を発表する。齋藤梨津子は、子育て期の人々がアートを鑑賞・体験する場面を考えるにあたって、現在の「子育て支援」政策が忘却している可能性として、1960年代に公民館の実践から生まれた「学習としての託児」の思想を取り上げる。そして、ケアの担い手であると同時に労働力としても期待され、客体化される「母親」が、子どもをあずけながら市民としての主体形成を目指す学びの今日的意義を検討する。

本パネルの議論は、アートの場における子育てに着目しながらも、それを産む性としての「女性」の問題として固定化せず、様々な状況下にある人々の声に耳を傾け、共通の課題や交差する不平等な現状を変革するためのヒントの共有を目指すものである。

Panel 3

教室515

10:00-11:30

Japanese

1970～1980年代日本の反公害／環境運動における ローカルな知と実践、文化

■ Organizer

西 亮太

中央大学

■ Panelists

西 亮太

中央大学

嶽本 新奈

お茶の水女子大学ジェンダー研究所 特任講師

番園 寛也

熊本学園大学水俣学研究センター客員研究員

いま日本では、原発回帰とも言える政策が展開されつつあるが、その論拠とされる「カーボンニュートラル」やSDGsの称揚は、「グリーン」を合言葉にしたグローバルで新しい環境意識と資本の論理が結びついたものだ。だがこうした掛け声は、各地域や時代のローカルな知と実践の蓄積の上に立ち上げられたものではない。むしろ、連続と積み上げられてきた人びとの思想や運動の経験を忘却／抑圧することで「新しさ」が担保されているのだ。本パネルでは1970～80年代の環境思想と反公害／環境運動に焦点を絞り、その現代的意義を批判的に検討する。西亮太は当時の英米の環境言説を手掛かりに、日本における「環境」概念の導入とその政治的位置づけの変遷を概観する。冷戦下の当時の日本では、文学者らが中心となって欧米の反核と環境論を翻訳・紹介しており、そうした動きは行政レベルから個々の運動までひろく影響力を持っていたと考えられる。本報告は、当時の日本の住民運動をそうしたグローバルな政治・文化の文脈に位置づける準備作業となる。番園寛也は原田正純の思想を手がかりにローカルな知のあり方とその可能性を検討する。原田は医師として水俣をはじめ、九州、アジア、南米／北米の公害や労働災害の現場で患者、被害者と出会い、診察や実態調査に従事した。本報告では、そうした経験を通して地方／中央、民衆／専門家という権力関係の中でローカルな知を捉える原田の思想の今日的意義を考える。嶽本新奈は、1984年から続く天草環境会議におけるジェンダーの問題に焦点をあてる。石炭火力発電所建設反対運動から始まった天草環境会議は地元の農家や漁師、組合の人々を巻き込んでの住民運動へと発展したが、運動内のジェンダーの問題はこれまで見過ごされてきた。地域に根づいた性別役割分業の前提と、そうした慣習のなかで当事者たちがどのような思想や言葉を紡ぎ出していったのかを検討したい。

Panel 4

教室503

15:00-16:30

Japanese

PUNK Against Sexism

——もう一度パンクを真剣に考えるために——

■ Organizer

稲垣 健志

金沢美術工芸大学

■ Panelists

山本 浩貴

金沢美術工芸大学

川上 幸之介

倉敷芸術科学大学

イライザ・ロイヤル

イライザ・ロイヤル&ザ・総括リンチ

本セッションは、かつてディック・ヘブディッジや、ジョン・サヴェージ、ポール・ギルロイらが論じた「パンク」にもう一度着目し、今これを真剣に考える意義をディスカッションするものである。この企画の根本にあるのは、「日本のカルチュラル・スタディーズはパンクとうまく出会えていないのではないか。」という問いである。ヘブディッジの『サブカルチャー』（1986年邦訳）や、サヴェージの『イングランズ・ドリーミング』（1998年邦訳）は、カルチュラル・スタディーズという文脈を十分踏まえることなく翻訳されてしまった。また、1987年に書かれたギルロイの『ユニオンジャックに黒はない』が翻訳されたのは、ようやく2017年になってのことである。つまり、我々はカルチュラル・スタディーズというフィールドで、まだパンクについてきちんと検討できていないと言える。「もう一度パンクを真剣に考えるために」、当日は、特にセクシズムに対抗する「文化的武器」としてのパンクの可能性をフロアと共に模索してみたい。

本セッションの司会は山本が務め、まず稲垣がヘブディッジやギルロイの「パンク論」を簡単に整理したうえで、彼らの研究の対象である1970年代後半のイギリスのパンクシーンに焦点を当て、当時のパンクたちがどのようにセクシズムと戦っていたのか概観する。次に日本各地で「PUNK展」を企画している川上が、その後にパンクがどのように現在に至るまで研究されてきたか、セクシズムを含むいくつかの例を挙げ紹介する。そして三番目に、「征服されざる者」や「家父長制にツバを吐け」などの曲を持つパンクバンド、イライザ・ロイヤル&ザ・総括リンチのヴォーカル&代表であるイライザ・ロイヤルが、自身の作品や活動に触れながら、「反セクシズム」パンクのアクチュアルな実践をオーディエンスの脳と耳と心に突き刺す。その後、フロアも巻き込みながら、カルチュラル・スタディーズにおけるパンク研究の可能性を探ってみよう。

Panel 5

教室514

15:00-16:30

Japanese

戦後教育版画・文集から浮かび上がるもう一つの戦後史——「新しい戦前」における「新しい戦後史」の可能性へ向けて——

■ Organizer

高原 太一

成城大学グローバル研究センター

■ Panelists

町村 悠香

町田市立国際版画美術館

高原 太一

成城大学グローバル研究センター

角尾 宣信

和光大学

敗戦直後の1946年に発表された『アメリカ教育使節団報告書』を端緒とし、戦後日本の教育行政は生徒の自主性や創造性を育む「民主化」へ向けて大きく舵を切った。そして学校教育の現場では、綴り方教育など民間教育運動の隆盛を受け、教育版画や文集作成が積極的に導入されていった。本発表は、これまで史料または作品として真摯に分析されてこなかった、児童の手による版画や作文に注目し、この国の戦後史において等閑視されてきた子どもやその生活から浮かび上がるもう一

つの戦後史を析出するとともに、この「新しい戦後史」から「新しい戦前」とされる現在への抵抗の視座を紡ぐものである。

具体的には、以下三つの視点から、戦後史の新たな切片を露わにしたい。まず、これまでの戦後美術史において注目されてこなかった教育版画運動とその作品群に注目することで、生活者としての子どものまなざしが捉えた戦後社会のリアルを浮上させるとともに、魯迅が主導した中国での木刻運動を起点とする当該運動の日本を超えた広がりを提示し、作品の有するリアリズムがもたらす抵抗性のグローバルな意義を析出する。続いて、砂川闘争に関する砂川中学校の文集を題材とし、生徒たちの作文から炙り出される、知識人の記録や公的史料には記されない地元・砂川の生活者たちが体験した抑圧や暴力の具体相を析出するとともに、それに触れた彼ら・彼女らの実感や抵抗へむけた主体性の生成過程を考察する。そして、当時隆盛していた児童画を主題に据えた映画『黄色いからす』（五所平之助監督・松竹・1957年）の分析を通じて、児童側のまなざしだけでなく、そこに関与する両親や学校関係者ら、大人との関係性、さらに教育行政に関与する国家側の意図を探るとともに、大人と国家が協働して展開される戦争および敗戦をめぐる外傷性記憶とその隠蔽が教育運動および生徒に与えた影響を考察し、そこからの脱出経路を探る。

Panel 6

教室515

15:00-16:30

English

Affective Labor in/for Japan:
Creative Industries and Public Diplomacy

■ Organizer

OYAMA, SHINJI

Ritsumeikan University

■ Panelists

Cabaña Rojas Isabel

Ritsumeikan University, Kinugasa Research Organization

Maiuga Alexandra-Maria

Ritsumeikan University, Graduate School

Marini Raffaella

Ritsumeikan University, Graduate School

Despite the global success of Japanese popular culture and the meteoric rise of its national brand, there is a noticeable lack of academic interest in creative labor studies. This scholarly investigation into the issue of labor in creative industries has garnered global attention yet remained underdeveloped within Japan. In an attempt to fill this gap, this panel invokes the notion of affective labor and provides critical insights into two types of creative labor in and for Japan.

Firstly, we examine pressing issues concerning creative workers in Japan. Oyama delves into recruitment and promotion at a manga publisher, which serves as the platform for some of the world's most prominent media franchises. Maiuga explores the phenomenon of transforming the passion for Japanese popular culture into a career, focusing on the migration of foreign workers drawn to Japan's video game industry. Secondly, our attention will shift to foreign nationals involved not in creative industries per se but in Japan's public diplomacy efforts in Chile and the UK. These individuals play a direct role in producing the desired affect that the state seeks to exploit for Japan's nation branding purposes. Cabana examines how Chilean nationals and Japanese diaspora work independently and voluntarily in promoting Japanese language and culture in Chile, and how their efforts are harnessed by the state in its pursuit of "soft power". Marini investigates various issues concerning a diverse team of British professionals who are in charge of planning and operating the Japan House in London, one of the Ministry of Foreign Affairs's most recent and significant nation branding projects.

The exploration of these topics will shed light on intricate and personal narratives of affective labor, encompassing complex cultural politics of exclusion/inclusion (in relation to nationality, gender, and class), representation, autonomy and self-realization, among many other things. Despite their geographical separation, those involved in affective labor are intertwined not only by the international division of cultural labor but also by the discourse of brand nationalism, making this interdisciplinary investigation a valuable contribution to creative labor research and cultural studies more generally.

Panel 7 **教室501** **17:00-18:30** **Japanese**

日本の入国管理パラノイア

■ Organizer

挽地 康彦
和光大学

■ Panelists

長島 結
#FREEUSHIKU

宮越 里子
デザイナー

明戸 隆浩
大阪公立大学

高谷 幸
東京大学

日本の入管行政におけるここ数年の動向とそれを受けての言説空間の拡がり、過去数十年間のなかでも特異な状況を示している。その特異性とは、「入国管理パラノイア」とでも呼べるような恐怖の病理学的形態が流動的ないしは断続的にあらわれる渦の中に、市民社会もろとも呑み込まれている様を指す。

新たな在留資格である特定技能の導入、入管収容における監理措置制度の構想、送還停止効を反故にする難民送還への執拗なこだわり。度重なる「改定」入管法の後景となり、また前景をなすパラノイアは、脅威に苛まれてきた入管体制の脆い自己認識を反映しているといえるだろう。

本セッションでは、このような認識をひとつの準拠枠にしなが、この特異な状況に対してパネリスト独自の観点からメスを入れていくことを想定している。

Panel 8 **教室514** **17:00-18:30** **Japanese**

抵抗としての複雑さ：インターセクショナルな経験を可視化する協同オートエスノグラフィー

■ Organizer

桂 悠介
日本学術振興会特別研究員（PD）
立命館大学衣笠総合研究機構

■ Panelists

カツラ・シャハラ・バーヌ
外国ルーツ児童学習支援員

藤阪 希海
大阪大学大学院

なかだ こうじ えんりけ
大阪大学大学院

戦前、戦中には、国家による言説が支配的なものとなり、個々人の声は抑圧され、かき消される。そこで作用しているのは友と敵、ウチとソトそれぞれを単一の存在とみなす単純化のメカニズムである。国家だけではなく、学校、大学、職場、社会的活動、SNS など人の集まる所では、しばしば同様のメカニズムが働く。このメカニズムに対して異議申し立てを行ったとしても、そこで発せられた声は往々にして「個人の問題」とされてしまう。

単純化による抑圧やそれを生じさせる構造に抵うためには、支配的言説において不可視化される「私たち」自身の複雑さを示す必要がある。そこで本パネルでは、インターセクショナルリティ（交差性・複合性）を分析視点に、ジェンダー、エスニシティ、宗教、社会階層、世代など、単一のカテゴリーに還元されえない複雑な経験を浮き彫りにする。

バーヌ報告『『危険な交差点』で働く』では、職場における「女性」「ミックスルーツ」「ムスリム二世」当事者としての経験を、インターセクショナルリティを用いて分析する。これにより、非当事者からは理解され難く、ともすれば否定される当事者のリアリティを可視化する。また、マイクロアグレッションの予防や回避の方法を考察し提案する。藤阪報告「複雑さの証明：伝わらない問題を伝えようとする」として、初等教育で受けた「スクールハラスメント」とも呼ばれるような指導を例に、

問題提起の困難さを示す。不適切な指導の課題化は「教師への個人的復讐」や「教師が異常」等、個人の問題へと矮小化されるため困難を伴う。被抑圧的経験を当事者の視点で表現することで、制度や社会における潜在的問題を顕在化する糸口を探る。

なかだは「むーちーさんと私：交錯するまなざしにむきあうために」と題した参加型ワークショップを行う。「むーちーさん」とは、なかだ自身が作成した、6つの「ち」《知・口・地・血・土・Ei》について分析し考えるための図であり、これを用いて「他者理解」の手前の段階の自身を見つめ、その複雑さを捉え直すことを目指す。

Panel 9 **教室515** **17:00-18:30** **Japanese**

戦争の影に隠れて——性売買に関わる女性たちの位相から——

■ Organizer

高原 幸子
金沢星稜大学

■ Panelists

石倉 香鈴
立教大学大学院

高原 幸子
金沢星稜大学

性売買に関わる女性たちに関して、戦時中からの歴史を辿ると、現在の性暴力に対する状況と女性保護事業への思想の流れが理解される。

本報告において、石倉は、婦人保護事業において、性売買に関わる女性たちの状況を、主に 1950 年代の売春防止法の成立した前と後のモーメントを注視しながら、その時代背景とともに詳述する。

一方、高原は、従軍慰安婦になった女性たちのシンボルとなった「平和の少女像」をめぐった公共アートの状況を、そのシンボリズムが醸し出す女性の人権の位相を歴史的背景から述べる。

こうしたなかで、AV 新法の問題点や女性支援新法などの現在における性売買に関わる女性をめぐる議論について、戦争の時代的背景からの影の部分として綿々と続いた性差別的観点を抽出することで再構成する。

関東大震災朝鮮人・中国人虐殺から100年——大震災と虐殺を結びつけた罪を問い、未来を繋ぐ行動——

■ Organizer

梁・永山 聡子

1923 関東朝鮮人大虐殺を記憶する行動
ふえみ・ゼミ & カフェ
成城大学

■ Panelists

鄭 優希

ペンニョン맹년

遠藤 純一郎

ペンニョン맹년
東京藝術大学

池 允学

ペンニョン맹년
1923 関東朝鮮人大虐殺を記憶する行動

魚住 遼

1923 関東朝鮮人大虐殺を記憶する行動
亜細亜大学
慶熙大学校

2023年は関東大震災から100年である。日本の近代化にとって分岐点ともいえる災害だったことは、あまりにも有名だろう。同時に東アジアの人々には、日本帝国主義がもたらしたレイシズムが思想や観念に留まらず、「生命の危機」、虐殺の記憶として息づいている。日本政府の態度は「教訓」にするものの、法制化はもとより、歴史の掘り起こし、謝罪・賠償・記憶の継承などは未だに行っていない。それに対して、真摯に取り組んできたのは、日本社会に生活する多くの市民たちと良識的な研究者であった。日本人による歴史掘り起こし運動、在日朝鮮人、在日中国人たちの絶え間ぬ真実の追求であった。そのような地道な活動は、一定の社会認識を構築し、ジェノサイドとしての関東大震災は定着した。

しかし、この20年歴史修正主義・在日朝鮮人の権利などに対するバックラッシュが日本社会を席卷し、関東大震災による朝鮮人、中国人に対する虐殺の事実さえ否定し、記憶の継承を阻む言説が広がっている。さらに、様々な「戦術」で否定をしてくる側に対して、動きを阻止しなければならない社会運動側の高齢化も大きな課題である。このような時代に、世代を継承して粘り強く取り組む運動について、「ペンニョン」「1923 関東朝鮮人記憶する行動」のメンバーからそれぞれ報告を行う。

なお、本企画は、9月17日に開催する1923 関東朝鮮人記憶する行動、カルチュラル・スタディーズ学会研究企画委員会共同主催の「レイシズムを記憶する意義—関東大震災虐殺博物館を建立するために」(仮)のイベントである。

メディアに描かれる戦後の他者表象とその変容

■ Organizer

辰巳 遼

京都外国語短期大学

■ Panelists

辰巳 遼

京都外国語短期大学

アイシュワリヤ・スガンディ

京都外国語大学

林 姿穂

京都外国語大学

本発表では、1960年代から現代に至るまでのメディアに描かれる他者表象とその変容をヨーロッパ、アメリカおよび日本映画を取り上げながら考察する。本発表で取り上げる他者には女性だけでなく、宗教的マイノリティーが含まれ、その他者たちは共通して父権主義に対する無言の抵抗をしているように描かれている。

林は、第二次世界大戦後の映画界において、暴力・性描写の許容度が広がり、自立し支配力を持つ恐ろしい女性が頻繁に登場するようになったことに注目する。本発表では、ポーの短編小説をもとに製作された映画『世にも奇妙な物語』(1967)の中に登場するファムファタルと原作の登場人物を比較しながら、第二次世界大戦後の映画作品に映し出される女性のイメージの変容を明らかにする。

辰巳は、アメリカのモラルや感情と女性表象がいかに関わり、変容してきたのかをドラマ Clarice (2021)の中で、精神的に不安定な存在として描かれるクラリスに注目し、クラリスの感情やモラル感覚がアメリカの枠組みにおいて脱領土化、脱配置されるような存在として表象されているかを分析する。

スガンディは、21世紀において、小説や映画の中で「他者を語る」ことが世界的現象になっているが、そのような現象を背景に『沈黙』の再解釈を試みる。東西交流史という視点から遠藤周作の小説『沈黙』と日本におけるその小説の映画化(1971)、また英語圏(2016)およびポルトガル語圏(1996)での映画化を背景に、他者表象の変容を考察する。

これらの考察を通して、戦後、男性の不在を経験した女性や弾圧下におかれた他者が自立し、主体性をもつようになるまでのプロセスを明らかにしていく。

Panel 12 **教室514** **12:30-14:00** **Japanese**

メディアとジェンダーの交差点： 1970-1980年代メディア文化を中心に

■ Organizer

梶川 瑛里
名古屋大学大学院

■ Panelists

梶川 瑛里
名古屋大学大学院

北嶋 玲子
名古屋大学大学院

林 緑子
名古屋大学大学院

本発表は、1970 - 80年代におけるアイドル・予告編・アニメーションファンをメディアとジェンダーの観点から考察することで、現在の状況を照射する。この時期は、メディア産業の発展とメディア技術の個人化が顕著にみられる（Lamarre 2009、2018）。映画、テレビ、雑誌、ビデオ、広告、ニューメディアなど複数のメディアを跨ぐ実践が複雑な絡み合いを加速させた最初期だといえる。それは、女性の社会的立場が変化を見せる第2波フェミニズムからポストフェミニズム、第3波フェミニズムへの移行期でもあった（田中 2012）。特に、メディア化された女性という側面を考えると、メディア・イメージの主体であり客体でもある女性は、まさにその複雑さを体現する存在である。このような今日へと繋がる状況を踏まえ、本発表はメディアとジェンダーの関係性を考察していく。

梶川瑛里は、アイドルを中心にメディアとジェンダーについて考えていく。1980年代の消費主義／情報化社会における「かわいい」の発展は、少女をめぐる文化的想像力の更新を促した。本発表は松田聖子に代表されるアイドルをその例とし、1980年代の日本におけるメディアとジェンダーの不可分な関係性を身体的・文化的側面から再考する。

北嶋玲子は、予告編とメディア、そして観客の複層的な関係性を見ていく。1970年代以降、メディア環境が複雑化する中で映画宣伝のあり方も多様化が進んだ。そこで、「メディアミックス」を戦略的に推し進めた角川映画の事例を基に、予告編を取り巻く複合的なメディア環境を捉えると共に、そこに内在化された消費構造を分析する。林緑子は、この時期の男女ファンによる写真・ビデオカメラの撮影と制作というDIY的側面を見ていく。1980年代の男性オタクによるVCRの操作性からくるファンの能動性（ラマルル 2013）（永田 2022）とは異なる側面に注目することで、先行研究に資したい。以上を通じてメディアとジェンダーに関する問題意識を共有していく。

Panel 13 **教室501** **14:30-16:00** **Japanese**

ロシア・ウクライナ戦争と女性

■ Organizer

小笠原 博毅
神戸大学

■ Panelists

赤尾 光春
国立民族学博物館

石丸 敦子
東京外国語大学

ロシアによるウクライナ「侵攻」とその後の顛末が報道されるとき、当事者の政治家やワグネルも含めた戦闘員、前線に立つ兵士や捕虜の映像は、ほぼすべて男性である。女性の姿は避難民や犠牲者という枠組みで映像に登場することが圧倒的に多い。これは日本の放送局や通信社、新聞社の取材に限らず、外国の情報ソースでも大きく変わらない。今回の軍事「侵攻」とそれへの対処の現場における女性をどのように考えればよいか。彼女たちは何をしているのか。なぜ彼女たちは定型化されたフレームの内部に収められた姿でしか登場しないのか。このような問題を考えるために、本グループワークは『戦争は女の顔をしていない』によって戦闘域と非戦闘域にまたがる女性の証言を導き出したスヴェトラナ・アレクシェーヴィツチの研究者である石丸敦子と、ロシアやウクライナなどを含めた旧ソ連圏のユダヤ文化を専門に研究している赤尾光春を迎える。

アレクシェーヴィツチと「証言文学」という問題系に沿ってウクライナ戦争における女性の証言とその希少性について考えてみる一方で、YoutubeやSNSを通じたウェブ表現文化の女性の担い手が戦争をどのように描き出しているかについて、豊富な事例を元に検証する。それは、ウクライナ戦争の語られ方における女性の相対的不在を考察しながら、その反証を試みる取り組みにもなるだろう。

Panel 14 **教室503** **14:30-16:00** **Japanese**

アート・手芸・ジェンダー ——「ものづくり」のジェンダー格差——

■ Organizer

竹田 恵子
東京外国語大学

■ Panelists

山崎 明子
奈良女子大学

神野 由紀
関東学院大学

吉良 智子
日本女子大学

高橋 律子
NPO ひいなアクション

「手芸」は戦前の女子美術教育に取り入れられていたという歴史があるが、戦後、女性も男性と同じ大学で学ぶことができるようになったあと、美術教育から姿を消した。

西洋でも日本においても19世紀以降、「手芸」は「アート」とは認められず、仮に認められたとしても女性特有のものであるとされてきた。

一方で、女性アーティストたちが1970年代以降のフェミニズムアートのなかで、自分の母や祖母たちが行ってきたような「創造的な営み」を再評価し、手芸的な技法や素材を用いて作品を制作してきた。さらに、アーティスト以外の女性においても手芸文化はなじみ深いものであり、高い技術を用いたものと、身近な素材で制作した比較的簡易にできるもの、両者のつくり手は切り離されておらず、場合によりどちらも制作することが多い（山崎 2022）。

このように「アート」と「手芸」は近しい位置にありながら両者は分断され、一方のみを評価する言説的な権力が見いだされる。そして手芸的なものを使用することにより、そうした権力への抵抗が行われることもある。

さらに、現在の「手芸」を含む「ものづくり」は女性だけでなく移民や周縁化された男性にも広がり、彼らは近代家族の家父長制のなかで女性が行ってきた手仕事を委譲されているという状況がある（山崎 2023）。

本パネルでは、山崎明子教授による著作『「ものづくり」のジェンダー格差—フェミニナイズされた手仕事の言説をめぐって』（人文書院、2023年）への応答として、デザイン、日本美術史などの専門家がそれぞれの立場から手芸や手仕事、アートをめぐるジェンダー化された言説について発表する。さらに著者からの応答をいただき、ディスカッションを行う。

Project Works

9.29 - 9.30

PJ 01

6F

パフォーマンス

Japanese

Read Through the Body

Organizer

余 玟欣

神戸大学国際文化学術研究推進インスティテュート

松本 淳也

神戸大学大学院

本プロジェクトワークスの目的は、バスケットボールというスポーツの歴史の変遷を、実際にプレーすることによる身体的経験を通じて参加者と共に読み解くことである。

バスケットボールは現在、選手同士の肉体が激しくぶつかり合うマッチョなスポーツの代表として知られるが、実は1891年の競技成立当初は暴力の抑制こそがその根本原則だった。本プロジェクトでは、参加者と一緒に1891年当時のルールと、現在のルールの両方でプレーすることによって、そのメカニズムの変容を体感し、考察する。

プロジェクトワークス全体は3時間予定で、1プレーを40分に設定し、全3プレーを行う。

参加人数：1プレー10人まで

(審判はプロジェクトワークス担当者が担当するが、プレー人数が4人未満の場合、担当者も参加する)

コート：ハーフコート

スケジュール (1プレー)：

6分：ルール説明

12分：1891年のルール

5分：休憩

12分：現在のルール

5分：意見交換

ルール：

1. 1891年当時のルールとして次の7点を採用する。

- ① サッカーボールを使用する
- ② ボールがリングを通過しないようネットを縛る
- ③ ドリブル禁止
- ④ 身体接触禁止
- ⑤ 個人ファウル2回＝一時退場
- ⑥ チームファウル連続3回＝相手チームに1点
- ⑦ 前後半5分 (休憩2分)

2. 現在のルールとして次の6点を採用する。

- ① バスケットボール (6号または7号) を使用する
- ② 一般のリング
- ③ ドリブルあり
- ④ 身体接触あり (ファウルでない範囲)
- ⑤ オフェンス側のファウルで攻守交代
- ⑥ 前後半5分 (休憩2分)

PJ 02

5F

展示・上映

Japanese

『ははの声』

『Drifting Islands, Still Water』

『CONTACT ZONE ミュージアムショップ』

Organizer

砂守 かずら

砂守メディアアーカイヴズ

木村 奈緒

美学校スタッフ

母をテーマとした2つのプロジェクト「ははの壁」(砂守かずら+ことば 前川朋子)と、「声をさがして」(木村奈緒)の合同展示です。母親の日々の生活や、そのなかで感じる違和感や問いを形にしています。

PJ 03

5F

パフォーマンス・展示

Japanese

カルチュラル・タイフーンを描く

Organizer

桜井 旭

金沢美術工芸大学大学院

私は現場制作を徹底することで絵画を制作しています。刻々と変化し続ける現実を実際に観察することにより、時間の変化や空気感、遠近感、触覚的な感覚などを体感し、リアリティーのある絵画の表現を目指しています。博士後期課程では「多元的リアリティーの絵画表現」と題して研究を行っており、大学構内や身近な風景、アーティスト・イン・レジデンスなどの制度を利用して様々な現場で絵画制作を行なっています。現場での制作には環境からの影響や人々とのコミュニケーションなど、色々な出来事が起こります。多くの場合、絵画を制作する上では不自由かつ弊害にもなり得る現象ですが、その過程から生まれる絵画表現には、制作者である私ですら想像できないような多元性を見出し、新しい表現となり得るのではないかと考えております。今回は、学会という環境で、実際に皆さんが発表をしている状況をモチーフに、絵画を制作するという一種のパフォーマンスを行いたいと思います。2日間、1枚のキャンバスの中に断続的に目に見える風景を描き重ね続けます。描く場所は固定せず、特定の完成図を用意することもしません。最終的にむちゃくちゃな表現になる可能性もありますが、絵の具やイメージがキャンバスに重なり、レイヤーが生まれていくプロセスは、人間が止めどなく経験する現在と蓄積していく記憶、その連なりを表現し得るのではないかと思います、実践したいと考えております。

PJ 04 5F 展示 Japanese

幕末日本のスケッチ ～英国人が見た 12 章～

■ Organizer

大村 隆景

武蔵大学人文学部

伊藤 光

武蔵大学大学院

1861 年から 1865 年の約 5 年間に渡り、英国王立海軍に随行していた J.M.W. SILVER がその当時の日本をスケッチ付きでまとめ記したのが『sketches of Japanese manners and customs (幕末日本のスケッチ)』である。

現在本資料は江戸東京博物館及び同志社大学図書館において所蔵されている。全 12 章で構成された本資料には豊富なスケッチと挿絵によって当時の幕末期日本が克明に描き出されているものの、詳細な邦訳や研究は未だされておらず、その論究も少ない。

ただ惜しまれつつも昨年年末に逝去した渡辺京二氏の名著『逝きし世の面影』にて彼が指摘しているように、異邦人による幕末日本への貴重な観察や証言は未だ看過されている中にある。当時ならではのオリエンタリズムや日本民俗学の諸要素が詰まったこれらの未邦訳の資料をひとつひとつ紐解くことには十分な意義がある。

そのため本研究では『sketches of Japanese manners and customs』の翻訳に挑み、当時の異邦人からみえた幕末期日本の諸制度、文化、慣習を、武蔵大学教授の福原敏男氏と同大准教授リンジー・モリソン氏の御協力を受けながら、誤認識も含め外部の目から視えた多面的な日本文化を再考するものである。

本展示では、それらの大量のスケッチや挿絵の内、読者や鑑賞者の注目を惹くようなものを選んだ。それら数々の情景は現代社会を生きる我々にとってほとんどなじみのないものである一方で、その形態を少しずつ変化させながら生き続けているものも存在する。

PJ 05 5F 展示 Japanese

分裂と生成——女性身体の抽象表現をめぐって

■ Organizer

羅 婧瑄

金沢美術工芸大学大学院

この展示は、陶を素材として、抽象的な女性身体を表現した展示である。メルロー＝ポンティによる「状況の中の身体」及びフーコーによる「規範化される身体」の影響を受けて、作品は単純に身体の輪郭を描くことではなくて、社会的、文化的、心理的といった要素が同時に作用して「グロテスクな身体」という幻想的イメージを作り出す。すなわち一種のサイボーグ的な身体である。精神的な「内なる身体」と物質的な「外なる身体」を相互的に塑造していく仕組みを陶による脱構築的な抽象構造に転換し、空間の分裂、拡張と延伸を通して身体の変形を表現している。

それぞれの作品に植物、動物、女性身体といったイメージが融合していることを通して複合的なメタファーを形成し、現代工芸と現代美術の境を跨いで陶磁素材の新表現に挑戦する。身体の局部をクローズアップすることを通して特定問題の議論を引き起こし、文化的属性、社会的属性が満ちる女性の身体を脱構築しようとする。

「口話」という作品は性器官、唇、木の葉といったイメージを基に造形する。口話は元々聴覚障害者が相手の音声言語を読唇によって理解する動きであるが、ここでは音声を出すことができない女性イメージ、あるいは聞き手がいないことを象徴する。

「新たな洞窟の比喩」という作品は子宮のイメージを基に造形し、洞窟に住む縛られた女性を象徴する。これは、「洞窟の比喩」というアイデア論を説明するためにプラトンが考えた“洞窟に住む縛られた人々が見ているのは「実体」の「影」であり、我々が現実に見ているものはアイデアの「影」に過ぎないのだ”という比喩から来ている。

「意識網」シリーズの作品は乳房、宇宙のイメージを融合して造形し、複雑な乳腺は意識のネットワークのように知恵のミルクを生産することを表現する。

この展示を通して、鑑賞者と現代社会で再び符号化された女性身体において見えるものと見えないものについて考えてみたい。

PJ 06 5F 上映 Japanese

革命の子どもたちが親になる時

■ Organizer

田沼 幸子

東京都立大学

■上映スケジュール

【9/2】11:45-12:45 (予定)

【9/3】12:15-13:15 (予定)

1959 年のキューバ革命の後に生まれた「革命の子どもたち」は、教育や医療が無償であり、個々人とその教育は社会と世界のためであることが当然のこととみなす環境で育ってきた。しかしソ連崩壊後、革命の理念と現実が大きくかけ離れた現実に失望し、出国を試みる者が絶えない。スペインに渡り、親になった経験を持つキューバ人らは、何に戸惑い、何を希望しているのか。彼らを毎年夏に訪れ、互いの子供の成長を見守りながら、カメラで追った。

PJ 07 5F 展示 Japanese

「自分以外の何かになる」実践のアーカイブ

■ Organizer

宮森 みどり

東京藝術大学大学院

「自分以外の何かになる」行為は、演技の方法を用いて他者と自己が重なることです。例えば誰かに感情移入したり、遠い他者の当事者性に自ら立ってみようとする能動的な姿勢そのものだと考えます。今回は、そのテーマと手法を扱い続けてきたアーティスト・宮森みどりの活動の軌跡と、最新作の《Like a Anna 01》の展示を行います。

PJ 08 5F 上映 Japanese

Hear the Place Sing

■ Organizer

阿部 修一郎

制作者である私の実感を舞台とした、約 42 分の記録映像。第 25 回写真「1_WALL」にて、ファイナリストに選出された。以下が、2022 年当時、制作に際して記したステートメントである。

何かが失われようとしている。しかしいったい、何が？ 本作は、建て替えが検討される制作者の実家を舞台とした映像作品である。物質的な空間と我々の身体は、不可分に絡まり合い存在している。故にある空間が失われることは、空間と結びつく身体喪失も意味する。私の家族の身体は、この住居とともにある。例えば、歩行のリズム。床の軋み。ものの置かれた位置。他には何があるだろう？ 何が失われたのかに気がつかないこと。この家で暮らした私は、それを最も怖れる。

それ故記録としての映像を撮った。本制作は来たるべき空間喪失と、それに伴う忘却に抗うための実践である。この映像に映るものが何かを知るのは、いずれ起こる喪失の後だろう。

上記のステートメントにも記されているように、この映像は、空間を失うこと＝身体を失うことという考えのもと、喪失と忘却への恐れから生まれた。そこで空間と身体の間によって立ち現れる、場所の経験をアーカイブすることを試みた。

具体的に行ったことは、固定カメラによる長回し映像の撮影である。廊下やキッチン、寝室など住居内の各所で、それぞれおよそ 30 ～ 60 分間撮影を行い、撮られた映像を再編集した。長回しの映像を観ることを通して、映された場所独特の時間感覚のなかへ、鑑賞者を誘うことを意図している。

PJ 09	6F	展示	Japanese
--------------	----	----	-----------------

“We’re from the West Coast”：西海岸からヒップホップとダンス文化を語るアSEMBリー

■ Organizer

黄 柏瀧

神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート

ヒップホップ文化は 80 年代から全米の音楽・映画産業に拡散しマスメディアに露出する機会が増えたものの、ヒップホップ文化はニューヨークで発展してきたものであると認識されたため、ニューヨークの視点からヒップホップを報道するマスメディアが大半を占めた。特に 1984 年にリリースされた映画『ブレイクダンス』などによる表象、またはダンス番組の『Soul Train』では、登場するダンスジャンルの多様性を問わずダンスジャンル問わず「ブレイクダンス」や「ストリートダンス」としてしか取り上げられなかった。また、1989 年にトーン・ロックの『Lōc-ed After Dark』が全米チャートで首位を獲得したことで、ウェスト・コーストのラッパーがヒップホップ界を席卷するまで、ニューヨーク以外のラップアーティストへの注目度も低かった。90 年代に入ってから全米ないし全世界でヒップホップブームが到来した。ヒップホップ界内部では東西海岸のラッパーによる「闘争」が起き、ラッパーであるトゥパックとビギーの「二人の死」までエスカレートしたが、それでもヒップホップは衰退しなかった。むしろ現在に至るまでヒップホップに匹敵する音楽ジャンルもまだ現れていない。ニューヨークのヒップホップ文化のみならず、ウェストコーストヒップホップ、テクノヒップホップ、ロックダンス、ポップダンスなども今やワールドワイドな人気を誇っている。しかし、脱ニューヨーク中心的な報道、表象、研究がまだまだ欠けている。そのため、本企画は、ウェストコーストのダンススキルを身につけたダンサーを招いてパフォーマンスを披露していただくほか、西海岸のヒップホップ文化を再現する動画・写真などを展示し、トークセッション、ダンスサイファーなどのイベントを開催する。これらを通じて、西海岸のヒップホップとダンス文化について、学界だけでなく世間の注目を引くことを展望する。

■ダンサープロフィール

Jamieson D. Gentlemen (カナダ、EB Family、ポッパー)

Jia Nong Lan a.k.a Blue (台湾、Blujuana Squad、ポッパー)

PJ 10	5F	展示	Japanese
--------------	----	----	-----------------

ZINE SALON

■ Organizer

諫山 三武

武蔵大学

ZINE SALON は 2022 年 3 月に発足した、学生と社会人による ZINE コミュニティです。編集、デザイン、出版など創作活動に関心のある人たちが集まり、毎月 1 回、情報交換会、製作ワークショップ、ZINE フェス出店、リソグラフ工房体験会、ゲストトークなど、さまざまな活動を（主に都内で）行っています。

ZINE (ジン) とは「誰に頼まれたわけでもなく、自分がやりたいからやる」という、ごく個人的かつ自主的な出版物を指します。言葉の定義はハッキリとしておらず、人によってバラバラですが、ページ数・判型・綴じ方など仕様が自由であること、少数発行であること、大手流通網に乗らないこと、小さなカフェや書店、あるいは手渡しで広げていくこと、といった特徴があり、一種の草の根運動のようなものであるとも言えます。

今回は ZINE SALON のメンバーが製作した ZINE の販売を行うと同時に、「ZINE をつくるとはどういうことなのか？」について、メンバーたちによる気まぐれトークを繰り広げます。単に「本を出して終わり」ではなく、そこからどんな世界が広がっていくのかについて、一緒に考えてみませんか？

PJ 11	5F	販売	Japanese
--------------	----	----	-----------------

TeTe Tea Store

■ Organizer

白石 江里香

YOMOYAMA.Inc

私たち YOMOYAMA.inc は共生社会の実現を目指し、外国人留学生の方々や日本で働く外国人の方々と共同してサービスを生み出す、東京外大発のスタートアップ企業です。

TeTe Tea Store は、昨年度は準備が追いつかず応募できなかったのが今回応募の機会を得られたことを嬉しく思います。TeTe Tea Store では、留学生の、狭山茶園での商品開発インターンシップから誕生した日本茶のスパイスティーバッグを現在 4 種発売しています。

当日はスタッフが 2 日間常駐し、スパイスティーのティーバッグを販売することを想定しています。ワークショップにおいては、インド人留学生直伝のお茶の入れ方をお伝えしたいと思います。また試飲ができない場合でも、看板やパネルを通じて商品の丁寧な説明に努めます。

現在、https://tete-tea.com において、TeTe #1 Roasted green tea with Cinamon (ほうじ茶×シナモン)、TeTe #2 Green Tea with Fennel Seeds (煎茶×フェネルシード)、TeTe #3 Japanese black tea with Green Cardamom (和紅茶×カルダモン)、TeTe #4 Japanese black tea with Clove (和紅茶×クローブ) の 4 種類のティーバッグを販売しております。

日本において留学生は就職などにおけるインフラ不足から、本来の実力を評価されないことが多いという現状を、YOMOYAMA は解決していきたいと考えています。TeTe Tea においては両者が協力することで、より文化がアップデートされ、魅力的になっていくことを、おいしいお茶を通して実感していただけたらと思います。

PJ 12	5F	展示	Japanese
--------------	----	----	-----------------

エターナル・トラベラー☆多〜カルタイ 2023 Ver. ～

■ Organizer

宮野 かおり

少女マンガ/イラストといった少女向け文化 (90's 後半～ 10's 前半) をベースに持つ作家たちが、過去の文化や歴史を遡ったり未来を想像したりしながら、自分達のルーツや行く末についてぐるぐると辿っていく果てしない旅のような展覧会をもとに展示を構成します。展覧会は今年の 3 月に行われたもので、今回はそれを再構成し、図録や記録をメインに、各作家の作品も同時に展示をします。

実存する伝説的ミューズの軌跡（音楽ドキュメンタリー映画）

■ Organizer

イデ
liaison record (リエゾン・レコード)

■ 上映スケジュール

10:00-12:00

当時を代表する歌姫リンダ・ロンシュタッドは、彼女のことを「男性と肩を並べた最初の女性」と評した。
 “女性の時代”の到来を予感させるにふさわしい存在であったジョニ・ミッチェル。彼女の名曲とともに、パフォーマンス映像を収録したドキュメンタリー映画を上映する。
 ここ数年よく見かける「〇〇〇、NOW (ナウ・なう)」というのは、そもそも彼女の曲タイトルからきているのではないか。それをあたかも自分だけが知り得ているかのように、誰もが自慢気に使っているように思える。私たちの心の奥に存在し続ける真なるアーティスト、ジョニ・ミッチェルの音楽の影響はかなり大きいといえるだろう。
 彼女の書いた名曲たちは、誰もが憧れる音楽であり、言葉であり、絵画である。
 当時ポップ・デュランやニール・ヤングと同じステージで歌い、なお今も語り継がれるフォークシンガーであり、優れたシンガーソングライターである彼女の音楽は、これからも永遠に受け継がれていくことでしょう。
 今年80歳の(八十寿)を迎えるのを記念し、彼女の人物像にフォーカスしたドキュメンタリー映像を上映したいと思います。

各上映スケジュールや展示の詳細など

Project Worksの
最新情報はこちら！



#Culturaltyphoon2023

カルチュラル・タイフーン 2023
大会実行委員会紹介

Cultural Typhoon 2023
Organizing Committee Members

大会実行委員長

浜 邦彦（早稲田大学）

大会実行委員会委員

諫山 三武（武蔵大学）	加藤 穂香（国際基督教大学大学院）	田中 東子（東京大学）
伊藤 守（早稲田大学）	川端 浩平（津田塾大学）	中條 千晴（リヨン大学）
井上 智晶（東京大学大学院）	川村 覚文（大妻女子大学）	菫 穎（早稲田大学大学院）
井上 弘貴（神戸大学）	黄 柏瀧（神戸大学）	堀口 剛（東京経済大学）
浦野 智佳（立命館大学大学院）	砂守 かずら（砂守メディアアーカイヴズ）	皆川 勇太（早稲田大学大学院）
大石 茜（成城大学）	高木 佳奈（早稲田大学）	八木 まりな（国際基督教大学大学院）
小笠原 博毅（神戸大学）	高原 太一（成城大学）	山本 敦久（成城大学）
郝 思潞（東京大学大学院）	竹崎 一真（明治大学）	山本 恭輔（東京大学大学院）

共催

早稲田大学教育・総合科学学術院

協力

青山 征彦（成城大学）	柳 志暎（東京大学大学院）
植松 青児（編集者）	吉田 夏生（トロント州立大学）
大尾 侑子（東京経済大学）	吉見 俊哉（國學院大学）
宮野 かおり（美術作家）	

大会広報用コンテンツデザイン監修

関根 麻里恵（学習院大学） 山本 恭輔（東京大学大学院）

ポスター・パンフレット・グッズデザイン監修

吉田 健嗣（デザイナー） Whisperflux（デザイナー）